

もっといい明日が見えてくる - Letters from Gnable

Gnable

グノレット

G-let

VOL. 18

2016年12月発行

大学受験グノーブル
10周年記念号

Gnable 10周年記念 卒業生インタビュー

知の力を活かして自分の人生を追求する。
その原点はグノーブルにあります。

保護者座談会 2016

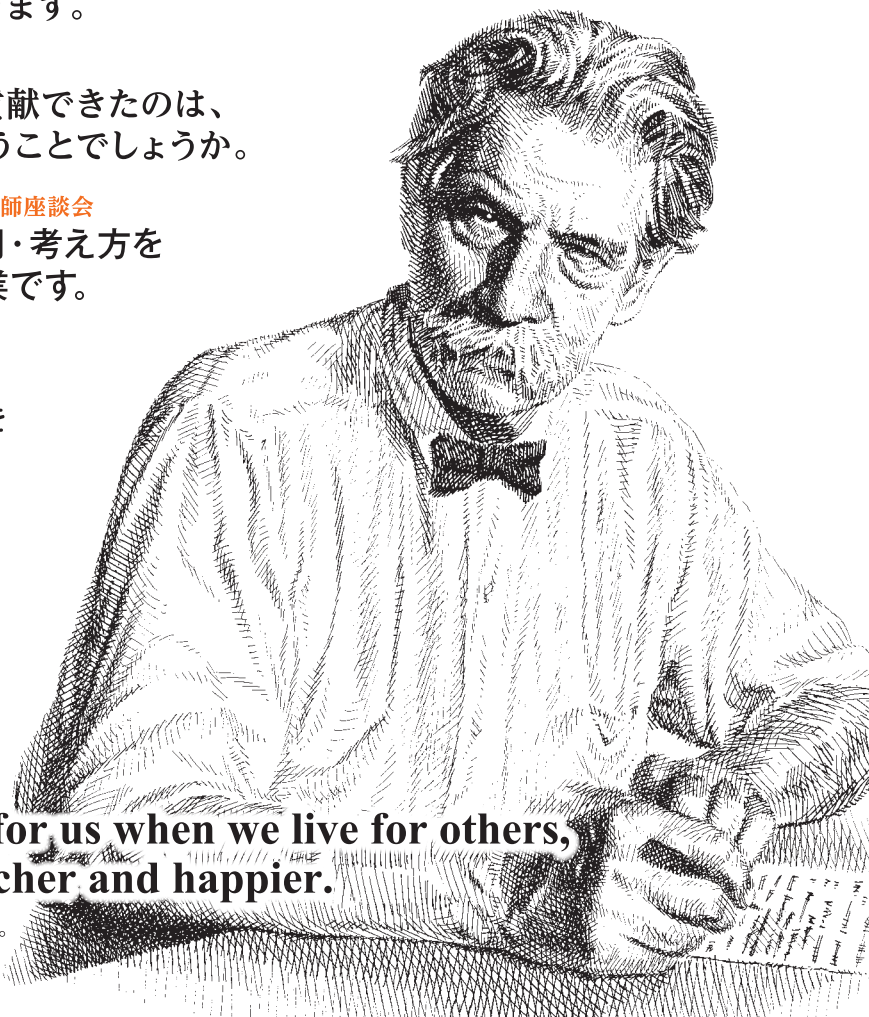
大学受験で、親として唯一貢献できたのは、
「ベストな塾を選んだ」ということでしょうか。

中学受験グノーブル〈社会科・理科科〉講師座談会

知識にとどまらず発想・活用・考え方を
育てるのがグノーブルの授業です。

英会話グノキッズから

外国に一番近い英会話教室
子どもたちが本物の英語学習を
確実に体験できるレッスン。



**Life becomes harder for us when we live for others,
but it also becomes richer and happier.**

人のために生きる時、人生はより困難になる。
しかし、より豊かで喜ばしいものにもなる。

アルベルト・シュヴァイツァー

Albert Schweitzer (1875年1月14日～1965年9月4日)

20代で神学博士・哲学博士。オルガン奏者としてパリのバッハ協会のオルガニストもつとめた。30歳から新たに医師を志し38歳で医学博士。アフリカの赤道直下の国ガボンで住民への医療に携わり、献身的な医療活動から1952年ノーベル平和賞受賞。



Gnable GROUP

巻頭
特集

Gnoble

10周年記念

卒業生インタビュー

大学受験グノーブルは2006年夏に誕生して、今年で10歳になりました。お通いいただいてきた皆さん、本当にありがとうございました。保護者の皆さまのご支援にも心より感謝を申し上げます。

開校当初から、私たちは生徒の皆さんが夢中になれる環境を目指してきました。「この先生についていきたい!」「授業が楽しい!」「信頼できる!」と思えば前向きな気持ちになれますし、主体的な姿勢は大きな効果につながるからです。

皆さんの志望大学合格と共に、進学後の活躍も視野に入れた指導に力を傾けてきました。皆さんの貴重な十代が未来を創る礎にならなければいい教育とは言えないと考えているからです。

10年の節目に、グノーブル1期生から10期生まで8名の卒業生にお越しいただき、貴重なお話を伺いました。卒業生の皆さんの言葉には、それぞれ「意味」と「力」がありました。一つひとつの言葉をかみしめ、私たちの指導態勢を見つめ直し、これからも生徒たち一人ひとりの成長のお手伝いを精一杯していきたいと、あらためて決意しました。



グノーブル代表
中山 伸幸



1期生 入江 哲朗 さん



1期生 内田 翔 さん



1期生 掛谷 千尋 さん



1期生 滝川 祐佑 さん



2期生 谷内 稜 さん



5期生 玉光 未侑 さん



7期生 長谷川 哲也 さん



10期生 田中 美也子 さん



グノーブルの先生方は謙虚で、研究者のような探究心を持ち、自らも学び続けていると感じていました。

1期生 いりえ てつろう 入江 哲朗 さん

東京大学大学院 総合文化研究科

超域文化科学専攻 (表象文化論分野) 博士後期課程
《筑波大附属駒場 / 東京大学教養学部》

学生として 学び続けることを選択

僕は今、駒場の大学院の表象文化論というコースで、アメリカの哲学や思想史を研究しています。もともと哲学が好きで、高校生の頃からよく哲学の本を読んでいたのですが、徐々に、文化史的、思想史的な関心が芽生えてきて、結局研究者の道を進むことになりました。

端的に言えば、僕は学生として学び続けることを選択したわけですが、その意味ではまだ、社会の第一線で活躍しているとは言えません。ただ、現在取り組んでいる研究には大きなやりがいを感じていますし、そうした蓄積は、日本が文化的に豊かな場所であるかぎり、社会にとって有意義なものであるはずだと信じています。

もちろん、表象文化論の学生がみな研究者志望だというわけでは決してありません。たとえば、このコースで学んだことを、博物館の学芸員やキュレーターとして現場で活かし

ていらっしやる方も多いです。ただ僕自身は、しばらくの間はもっと研究を深めていく方向で自分の今後を考えています。

いずれ僕はいったん、アメリカの大学院に留学しようかと考えています。今はまだいろいろと未確定なのですが、うまくいけば来年の9月からになるでしょう。現実的に言えば、アメリカで博士号をもらえれば、その後の就職においても重みが違う部分もあります。ただそうしたことより、もっといろいろ勉強したいという思いの方が強いです。アメリカに行けば全く違う環境でみっちり鍛えてもらえるはずなので、もうしばらく学生である期間を伸ばして、自分の知的欲求を満たしつつ、蓄積できることをもっともっと増やしたいと思っています。

知られざる アメリカ哲学を掘り起こす

僕がいま一番関心を持っているのは、19世紀の後半から20世紀の初

頭のアメリカです。この時期のアメリカは非常に重要な局面を迎えていました。

大企業が生まれ、消費社会が始まったのもこの頃です。大々的な広告や派手なカタログが至るところに出回りはじめ、欲しいものはすぐに手に入れてお金はあとから分割払いするということも可能になりました。また、映画が生まれたのもこの時期です。いわゆる、我々がいま知るアメリカン・ライフの基礎がこの時期に形成されたわけです。その意味でも、思想史的、文化史的な観点から研究することに面白みがあります。

さらに僕自身のもう少し狭い関心で言うなら、フランス哲学、ドイツ哲学などはポピュラーで、高校生でもフランスならデカルト、ドイツならカントを思いつくでしょうが、アメリカ哲学となると「そんなのあったっけ?」となる人が多いと思います。

倫理を学んでいる高校生ならプラグマティズムを思いつくでしょう。



プラグマティズムはまさに19世紀後半のアメリカで生まれた思想ですが、それはその後いったいどうなったのでしょうか？ また、プラグマティズム以外にアメリカ独自の哲学と呼べるものは何かあるのでしょうか？ そういった問いを深く探っていくことに僕は関心を抱いていて、その探究の鍵となる時期が19世紀末から20世紀初頭なのです。

知的好奇心に目覚めた 中学2年の夏

僕が哲学的なもの、思想的なものに興味を持ったのは中学生の頃です。中学2年生の夏休みに入る前に、学校から「新潮文庫の100冊」というPR誌が配られたんです。それをきっかけに何かに火がついてしまって（笑）、その100冊のなかから面白そうな本をピックアップして文学を読み始めました。

最初に読んだのはカミュの『異邦人』だったと思います。その後、ド

ストエフスキーの『罪と罰』など、いわゆる定番の世界文学に触れたことが、知的好奇心の土壌になりました。そこからさらに知的な背伸びを続けているうちに、いつしか哲学の方に興味が向かっていったという感じでした。

もうひとつは映画です。子どもの頃からアメリカ映画が好きで夢中になって観ていました。高校生になると、映画に加えて、図書館に行って映画評論の本もたくさん読みました。そのときに、子どもの頃に好きだったアメリカ映画を知的な角度から語る人びとがいることを知って、それまでの自分の趣味と知的な領域とが結びつき、ひとつの思想的な側面を形成していったと言えるでしょう。

東大のカリキュラムは前期課程と後期課程に分かれていて、2年生の後半から後期課程の専門の授業を受け始めることとなりますが、僕は教養学部の中の科学史・科学哲学という学科を選びました。卒論は哲学

について書いたのですが、他方で、昔から興味があった映画や文学といった文化的なものをもっと深く追究したいという思いもあり、大学院では、哲学的な関心と文化的な関心の両方を満たしてくれる表象文化論を選択しました。

思想的言論の 転換点となった3.11

2007年、僕が大学1年生の時に、批評家の東浩紀さんと社会学者の北田暁大さんのお二人が、NHK出版から『思想地図』という雑誌を出版することになり、その創刊にあたって新人の原稿を募集していました。それに応募したところ入選して、2008年出版の第2号に僕の文章が掲載されました。

そのことをきっかけにさまざまな縁が生まれて、雑誌から依頼されて文章を書いたり、東さんの飲み会に参加したりするようになりました。僕は大学ではサークルには入りませんでした。毎週のように開かれる飲み会に行くのはサークル活動のような楽しさがありました。

しかし、そんな楽しい気分も、2011年の東日本大震災を境に一変しました。日本の思想的な言論の在り方を考える上で、2011年の震災以前・以後というのは大きな分かれ目になっています。

震災以前の2000年代は、アニメやゲームについての批評が一気に盛んになった時期でした。東さんの本がそのきっかけを作ったと言えますし、彼のまわりには、僕のような、アニメやゲームが好きで大学生やデビュー間もないもの書きがよく集まっていた、事あるごとに飲み会が行われていました。ところが震災以降は、やはりどうしても、アニメやゲームを語ることが言論の最前線であるという雰囲気は薄れ始めます。

そもそも、アニメやゲームが批評

の中心的な主題となった2000年代は、歴史的に見ても特殊な時期だと言えます。かつての批評といえば、たとえば、数年前のセンター試験にも出た、小林秀雄が刀のつばについて語る文章のようなものを指したわけですから。その意味で、みながこぞってアニメやゲームについて語っていた2000年代のあの楽しい雰囲気は、震災によって一度断ち切られたからこそむしろ、歴史的な観点から再検討する必要性が生まれていると僕は思っています。

また、これは偶然の成り行きですが、2011年は僕が大学を卒業して大学院に進んだ年でもありました。つまり、震災前後の言論を取り巻く状況の変化が、自分の個人的な環境の変化とたまたま重なったわけです。なので、2011年の前後で僕自身も、さまざまな意味で気持ちが大きく切り替わりました。

受験直後の英語力は ひよっ子レベル

大学4年間は長いようで短いものです。その期間をどう過ごすべきかと後輩から聞かれることもあります。僕としては、「好きなように過ごせばいい」としか言えませんね(笑)。

大学が高校と異なる点のひとつは、ひと学年の人数がとても多いということです。たとえば東大の場合はひと学年に3000人以上の学生がいて、高校とは比較にならないほどコミュニティが多いので、人間関係をリセットすることも難しくありません。だからたとえば、あるサークルに入ったもののさまざまなトラブルのせいで居心地が悪くなったりしたら、無理をせずさくっと辞めるのが良いのではないかと思います。自分の興味の赴くままに好きなことにチャレンジした方が良い学生生活を過ごせるはずです。

あえてつけ加えるなら、大学に入ったあとも英語の勉強はきちんと続けた方がいいと強く実感しています。

僕自身は、受験勉強ではとくに英語に力を入れていました。なので、その反動もあって、大学に入ったあとはフランス語という新しい外国語を一から学ぶことが楽しくなり、英語が少し疎かになった時期がありました。東大で最初に受けた英語の授業がグノーブルでやっていた英語よりも若干やさしかったこともあり、高校時代に蓄積した遺産で食いつぶせるだろうという甘い考えもありました。しかし、せっかく大学受験まで英語の勉強を積み重ねてきたのに、数年間とはいえブランクを設けてしまったことに、今はもったいなさを感じています。

大学入学直後というのは、英語の感度も高まっている時期なので、その感度を維持しようという意識を持ち続けた方が後々有利です。僕はいまアメリカの哲学や思想史を研究するようになったので、日々英語を勉強しているわけですが、どんな道に進むにしてもこれから英語は絶対に必要なだろうと思います。

昔、グノーブルの授業中に中山先生から言われたことがあります。大学受験をクリアした時点の英語力は、まだひよっ子のレベルなのです。大学に入った直後はそういう認識を抱きにくい部分もあり、事実僕自身も抱いていなかったわけですが(笑)、その後中山先生の言葉の意味をつくづく思い知らされることになりました。もちろん、どれくらい英語の修行を続けるべきかは各自の目標に応じて異なるはずですが、少なくとも、ネイティブの人たちと対等にコミュニケーションを行うためには受験生の英語力ではまだまだ足りないという事実は決して忘れない方がいいと思います。

受験の先を見据えた グノーブルの英語

グノーブルでは語源にさかのぼって英単語を教えていただきました。僕はそれらを、単語カードに書き込んで暇があれば読み返していました。そのカードには、授業で教えていただいた単語に加えて自分で調べて追加した英単語も含まれています。その他の復習としては音読をよ



入江さんがグノーブルの授業復習用に作った単語カード。今も大切に保管されていました。

くやりました。英語を習得するには最も効果的な方法だと思いますし、いまでも、難しい英文を読む際にはよく音読しています。

要約の演習では、中山先生に挑戦する意気込みで毎回臨んでいました。普通に考えればこれが正解だろうと思える内容でも、「いやいや、こうした要約の仕方もあるだろう」と、あえて違った角度から解答を出してみたり。少しひねくれた生徒だったと自分でも思いますが（笑）、僕にとっては非常にやりがいのある時間でした。

また、なんといってもグノーブルの授業の最大の特長は、限られた時間内に多くの英語を読む能力を身につけさせてくれることです。

英語を読む上では、時間をかけて一文ずつ正確に理解する能力ももちろん大切です。しかし、たとえばアメリカの大学に行ったら一週間に一冊くらいのペースで本を読まなければならぬわけですから、怒涛のごとく英語を読み進める毎日を乗り切るには、いちいち返り読みをせずとにかく前から順番に読み進めて、その中でアドホックに自分の理解を組み立てながら、常に現在進行形で理解していく能力が必須です。英語に対するこうした向き合い方を、僕はまさにグノーブルの授業を通して学びました。

そもそも、このような英語の読み方は、普段日本語の文章を読むときに私たちがやっていることと同じです。言い換えれば、英語を実用的に使いこなすには、こういう読み方をどこかで身につける必要があります。その点、たくさんの英語を読むためのシステムを毎週インストールしてくれるグノーブルの授業は、受験を終えた後にも大いに役立ちます。これは間違いなく、グノーブルに通い続けることの意義のひとつだと思います。

先生もまた 英語を学ぶ先輩である

受験までの間は誰もが必死で勉強します。そして現役で東大に合格したりすると、どうしても天狗になりがちです。そうしたプライドを煽るような塾の先生もいるのかもしれませんが、つまり、「東大に入れればお前はすごいんだ。選ばれし東大生になるために自らを高めよ」といった指導です。

一方、僕がお世話になったグノーブルの先生方は謙虚で、それぞれ研究者のような探究心を持ち、自らも学び続けていると感じていました。グノーブルでは、「先生は全知全能であり、だから生徒はその教えを受ける」という感じではなく、先生もまた英語を学ぶ先輩であるという感じでした。いまふり返ると、プライドを煽られることもなく、謙虚で研究者肌の先生方に情熱のこもった教えを受けられたことは非常に良かったと思います。ただ、東大に入った当初は僕自身もやや傲慢になっていたの（笑）、そのようなグノーブルの良さをあらためて思い出せるようになったのはしばらく後のことだったのですが。

グノーブルの先生はひとりも、「大学受験がゴールである」とは言いませんでした。大学入学をピークであるかのように煽って、そこに向けて全力を費やさせる方が生徒のやる気を高める上では簡単だと思います。でも現実には、大学受験はほんの通過点に過ぎません。自分を高めるプロセスははるか遠くの高みを目指す長い営みののだということを、中山先生をはじめとするグノーブルの先生方から教わりました。そうした先生方の精神についていきたいという受験生の頃の思いが、いまの自分をかたちづくる基礎のひとつとなっていることを強く実感しています。

グノーブルで学ぶ皆さんへ

人生において大学受験は非常に大事なものですが、長期的に見ればほんの小さな一歩に過ぎません。そのことはグノーブルで学んでいる方々なら分かっていると思いますが、そうした教えは往々にして忘れがちです。どうか長期的な目標意識を持って、謙虚な心を忘れずに、第一関門の大学受験を突破すべくグノーブルの先生方と共に頑張ってください。





いつも謙虚で、真摯に授業をされる先生の姿から、いつのまにか、医師としての姿勢も学べたと感じています。

1期生 うちだ しょう 内田 翔 さん

さいたま市立病院勤務

《開成／慶應義塾大学医学部》

医師を目指す人へ

慶應大医学部を卒業後、現在は、さいたま市立病院の内科後期研修医として勤務しています。医学部を卒業して臨床医となるためには、初期2年、後期3年、それぞれ研修医として病院勤務が必要になります。初期研修医としてはさまざまな診療科を経験して自分の適性を見極め、その後、後期研修医として専門分野のスキルを磨くことになります。

初期研修医として初めて病院勤務する時点では、出身大学の附属病院に残る人はそれほど多くありません。市中病院で実践的な医療経験を積めるため、最初の2年間はいったん外の病院に出て自分の専門を見定め、後期研修医として大学の付属病院に戻るのが一般的です。私が後期研修医としてもさいたま市立病院に残ったのは、地元であったことと、慶應大医学部のOBも多く、とても働きやすい環境であることを初期研修医時代に実感したからです。

後期研修後の身の振り方については、自由な選択をする人も増えてい

ます。大学の医局に入って医師としてのキャリアを積み、最先端の高度医療にも対応しうる教育が受けられますが、医局の人事によって将来はどこの医療機関に配属されるかわからないこともあり、最近では自分で病院を選んで医師の道を歩んでいく人も増えてきています。

感染症内科医を目指した理由

私は医師として将来的には、感染症内科医を目指しています。感染症内科医が扱う疾患は幅広く、身近な病例ではインフルエンザウイルスやノロウイルス、肺炎や尿路感染症などがあり、さらに専門性の高いものではエイズなどが挙げられます。またここ最近、デング熱やジカ熱など輸入感染症への備えも必要です。こうした病に対する処置に加え、院内感染の予防対策や対処方法を考えたり、各科の先生に対して抗菌薬選択のアドバイスをすることも少なくありません。

初期研修医の頃は、外科や産婦人科、泌尿器科など手術をする科を考

えたこともありましたが、各科の手術もやりがいがあって必要不可欠なものです。私はじっくり考えることの方が好きだということに気づき、手術をする科は選択肢から外しました。

また、内科治療にあたっては、さまざまな治療を行って反応を見ながらも、果たしてどの治療が効いているのかが分からないことも多々あります。その点、感染症の場合は、「この臓器にこんな菌がいるから、この抗菌薬を投与すれば効くはずだ」と、ある程度論理的に考えられます。また、感染症は適切な治療を行えば再発も少なく、治癒することが多い病気なのです。私が医師として自分の進むべき道を決める上で、この「論理的に考え、完全な治癒が望める」という部分がとても大きなポイントになりました。

医療現場のリアル

免疫の研究医だった父の影響もあり、幼稚園の頃から将来の夢は医師でした。それから大学卒業まで医師



になりたいという思いは持ち続けていましたが、初期研修で初めて病院勤務した時は、それまで思い描いていた医師像とはずいぶん隔たりがあるように感じました。

病院に入院していらっしゃる患者の多くは高齢者です。中には、90歳、100歳という患者さんや寝たきりの方も多くいらっしゃいます。当然そうした方々はもともと体力が衰弱しており、たとえ適切な治療を行ったとしても、元気に退院することは望めないことが多いです。そういった状況で、果たしてどこまでの医療を提供すべきなのか、医師の選択が本当に患者さんやご家族のためになるのか、といったことで悩むことも少なくありませんでした。

入院中には点滴をすることが多いのですが、しかし高齢者の方々の血管は細く、なかなか針が入りません。何度も痛い思いをさせてしまい、「これは本当に本人のためになるのか」と、心が揺れてしまったこともあります。医療現場のリアルを知ってショックを受け、色々なことを考え

させられました。

医師の仕事は幅広く、毎日バリバリ手術をしている外科医もいれば、一方で最後をどう看取るかという緩和ケアを専門的に行う先生もいます。同じ医師でもやっていることはまるで違います。ですので、大学時代から将来自分が携わりたい医療の知識を深めつつも、できるだけ幅広い視野を持って、自分に向いている医療を探しながら学び続けることが大事だと思います。

ほとんどの医師は 体育会出身者

あまり知られていないことだと思いますが、医学部の学生のほとんどは体育会の部活に入って6年間スポーツに打ち込みます。これは慶應大医学部だけの傾向でなく、多くの大学でも同じです。「医学部体育会」という医学部生だけで構成された組織があり、それぞれのスポーツで医学部日本一を目指すのです。

私はアイスホッケー部に所属して

いました。未経験でしたが、すっかりのめり込み、大学生活の中心には常にアイスホッケーがありました。その分、勉強が疎かになっていたときもありましたが、OBからも「学生時代は部活を一生懸命やるのが、将来医師になってから生きてくる」と言われ、その言葉を隠れ蓑にして(笑)、部活中心の生活を送っていました。

サークルではなく、医学部体育会に入るのには、やはり医学部の先輩・後輩との縦のつながりを作るためです。初期研修医で勤務した病院に出身大学のOBがいれば、まず「何部だった?」と聞かれます。そのくらい医師には体育会出身者が多く、そこから共通の話題が見つかることもありますし、その先も親近感を持って接することができるようになります。

医学部生にとっての英語

現在は若干のカリキュラム変更があるようですが、私が学生の頃はまず1年で教養課程を終え、2年から基礎医学を学び始めて、4年の途中くらいから臨床医学の勉強を始めました。4年終了時には「白衣式」が行われ白衣が授与され、5年から臨床実習に参加しました。そして6年の卒業間際に医師国家試験を受けて卒業しました。

教養課程は1年だけでしたが、英語の授業は3年生までありました。臨床実習で各診療科をまわった時には、カンファレンスでの発表やレポート作成などの際に英語論文を読まなければいけないことも多々ありました。

英語論文には読み方があって、サクッと読むのであれば最初のabstractで概要だけ読んで、後はfigureやdiscussionを読んで全体像だけ掴みますし、ちゃんと読むのであれば、研究方法も含めてしっかり

読んで批判的吟味をしなくてはなりません。論文によっては、自分たちの研究成果を強調したいがために結果を都合よく解釈しているものもあり、細部まで踏み込んで内容を理解する必要があります。

こうした中で、グノーブルで英語を学んで役立っているのが、人より圧倒的に早く読めるということです。振り返みをせず、前から英文を読みこなしていく方法は、素早く論文を読むために必要不可欠です。

また、論文だけでなく、日常の診療でも速読が必要になります。たとえば、世界中の臨床医が、診断や治療に関する判断を行う上で参考にする「UpToDate」というサイトがあります。もちろん情報はすべて英語で、最新の医学知識を得ることができます。これを日常の臨床に活かすためには、診療の合間の時間を使ってパッと見て、サッと理解できる英語力を持っていないではなりません。じっくり読んで、時間をかけて理解して、といった余裕がないことが多いです。

また、論文抄読会などの機会でも、

辞書を片手に英単語の意味をいちいち調べて、ものすごく時間をかけて全文を日本語に訳してから発表する人もいます。私はグノーブルで英語の土台ができていますのでサラリと読めますし、所々に分からない英単語が出てきたとしても、前後の文脈から意味が推測できます。

英語が苦手な人は、医学部に入ってから苦労します。医師というのは、やっていること自体は文系寄りのことが多く、また、職業的な知識を得るための文献は英語が多いため、英語ができなければ話になりません。

医師の仕事に活きている グノーブルでの学び

お世辞抜きにして、グノーブルで学んだことがなければ今の自分はないと思っています。高校生の時、英語が読めるようになって、得意科目にできたその自信が、大学受験でも医師となった今でも生きています。この経験を、ぜひとも今グノーブル学んでいる後輩の皆さんにお伝えし

たいと思います。

私がグノーブルに入った時は、塾としての実績は皆無でした。ただ、中山先生の授業を受けた時の驚きは今でも忘れません。「こんな授業受けたことがない!」というくらいの密度の濃さで、時間が過ぎるのが早く、先生ご自身もすごくパワフルでした。

毎回学ぶことが多くで大変でしたが、実力ががついていることが実感でき、そう実感できることが嬉しくて通い続けられたのだと思います。また、英語を学ぶ上でさまざまな文章を読み、解説を聞いて、英語以外の教養やものの考え方なども学び深めていくことができました。

中山先生の授業で何が衝撃的だったかという、具体と抽象の行き来が自由自在だったことです。抽象的で難しい内容の英文を身の回りのことに置き換えて分かりやすく説明してくださったり、逆に具体的な事例を述べた文章から一般論を導いてくださったり、本当にすごい授業でした。

分かりやすく説明する能力は医師



にも求められる大事なスキルです。患者さんをご高齢の方が多いため、難しい言葉を使って話しても伝わりません。図に描いたり、たとえ話に置き換えたりしながら、できるだけ分かりやすく、それでいて間違った理解を与えないような説明の工夫が必要です。それが必要とされる医師に自分になってみて、人にモノを教えることの難しさを実感する毎日です。

医師は患者第一 グノーブルは生徒第一

今思い出しても中山先生にはまったく傲慢なところがなくて、いつも生徒たちを尊重して真摯に接してくださっていたと感じられます。塾や学校では、先生がどんな姿勢で授業をするのかは、教室の雰囲気にも、

一人ひとりの生徒にも大きく影響を与えます。グノーブルに来ると、いつも気持ち良く真剣に勉強に向かえましたが、それには、中山先生のお人柄が大きく関わっていたと思います。先生からは、医師としての姿勢もいつのまにか学ばせていただいたように感じています。

私はまだ、病院勤務をして3年目の研修医ですが、人生の大先輩であるご年配の方々から「先生」と呼ばれる立場です。私はこうしたことに違和感があり、「先生」と呼ばれるのは正直抵抗も感じることもあります。そもそも「先生」と呼ばれるような存在になっていないと思うからです。

医師というのはある意味では特殊な職業で、誰にも頭を下げる必要がない仕事だと言えるかもしれません。どんな仕事でも取引先があり、

どれほど高い役職の人でも頭を下げてお願いしたり、お礼を言ったりすることがあるはずで。ところが医師は誰にも頭を下げずに、患者さんから「ありがとうございます」と言われ、製薬会社の人たちからは「先生、先生」と呼ばれています。そんな環境で勘違いして天狗になってしまったり、偉そうな態度で人に接するのが当たり前になってしまう人も残念ながらでてきてしまうのです。

慶應大医学部のある教授の、教授回診での言葉が印象に残っています。教授回診というと、廊下をたくさん歩きの医師を引き連れて歩き、患者さんの方がそれをよけて歩くというイメージがあるかと思います。事実、そういう教授もいます。ところがその教授は、「廊下の真ん中を歩くのは患者さんです。回診の時は医師の方が廊下の端を歩きなさい。白衣のボタンを開けて、肩で風を斬って廊下の真ん中を歩くような医師になってはいけません」とおっしゃいました。私はその言葉に深く感銘を受け共感しました。以来、病院の中ではきちんと白衣のボタンを留めて、廊下の端の方を歩くようにしています。頭を下げる機会の乏しい医師だからこそ、傲慢であってはならないのだと、私は肝に銘じています。

グノーブル 10周年にあたって

グノーブル 10周年おめでとうございます。私は1期生ということもあり、グノーブルには大きな思い出があります。当時から、授業は本当に素晴らしく、学ぶことがたくさんあって刺激を受けることばかりでした。これからも、英語力を身につけられる場としても、英語を通して広い世界が垣間見える刺激あふれる場としても、ますます素晴らしい塾であって欲しいと思っています。





ものごとに向かう基本的なモチベーションの高さは、グローバルで培われたものだと思っています。

1期生 ^{かけや} ^{ちひろ} 掛谷 千尋 さん

広告会社勤務

《東京学芸大附属／東京大学文学部》

伸び盛りの部門で奔走する日々

東大文学部を卒業し、広告会社に入社して6年目になります。もともとマスコミ志望で広告会社を中心に就活を行い、ご縁があったのが今の会社です。何らかのコミュニケーション手段で、人の心を動かす仕事をしたいと思っていたのがマスコミを志望した理由です。

最初の配属はインターネット広告を扱う部門でした。私はそこでマーケティングを担当しておりまして、クライアントさまからお預かりした広告予算を、いかに効率的に配分し収益を最大化するかという業務に携わっていました。

私が入社した2011年は、日本のインターネット広告市場規模はまさしく右肩上がりの成長期で、会社としても最も注力している部門でした。

広告業界は、そもそも残業が多い世界です。そうした中でも、インターネット系の仕事は伸び盛りというこ

ともあり、慢性的に仕事が発生して、当時は寝ても覚めても仕事について考えているような状態でした。

女性ゆえの辛さと楽しさ

新人の中で、マーケティングに入った女性は私一人。まわりはほとんど男性です。そうした中で、同じ業務をやるわけですから体力的にはかなり辛かったです。

一年目は右も左も分からないので、先輩に教わりながら仕事をしていましたが、2年目、3年目になると、少しずつ独立した仕事の仕方ができるようになりました。自分なりにイニシアチブをもって、仕事ができるようになってきたのだと思います。一方、女性ならではの力を発揮できた部分もあります。まわりがほとんど男性だったこともあり、女性系の商品は私が優先的に扱わせていただきました。自分にとって身近な商品ですのでマーケティングするのも楽しかったです。

一番楽しかったのが、コスメ系

のクライアントさまのオンラインショップの整備と広告出稿のお仕事でした。2011年、2012年頃は、大手コスメ企業がインターネット事業に本格参入した時期です。私が担当したクライアントさまは大手メーカーということもあって、商品自体も魅力的なものも多く、なんとといっても広告グラフィックがきれいで心躍りました。

また、バナー広告の中で訴求するポイントを自分なりに考えて、そのバナーを入口にして、多くの商品が売れた場合などは、「女性目線と考えたものだから効果があった」と手応えを感じました。

子育てを経験して考え方がシンプルに

インターネット部門にいたのは丸3年で、結婚を機に、コーポレート部門に異動しました。ここでの仕事は、社内で使うITシステムの運営・保守がメインです。たとえば、社内に新しい仕組みを導入する場合、ま

ずは私の部署でトライアルをして検証します。問題がなければ実際に導入し、社内に周知していくような仕事です。

インターネット部門からコーポレート部門に異動して3年。今年(2016年)の1月に出産しまして、現在は1年間の育休中です。子どもができていろんなことが大きく変わりました。目の前の生活のリズムから人生についての考え方で一変しました。でも、個人的にはそれを楽しんでいます。子どもを見ていると「ああ、人間って動物なんだな」と実感します。言葉で教えるわけではないのに、日々、できるしぐさや言葉がどんどん増えていくところに人間の本能のようなものを感じます。

大人になると頭でっかちになって、考えてからでなければ行動できなくなりますが、子どもは欲求のままに生きている。「人間って、こうやって大きくなっていくんだな」と改めて感じるができます。そんな姿を見ていると、私自身の考え方もシンプルになって、先のことにあ

れこれと思いを巡らせるのではなく、今、目の前にあることが大事に思えてきます。

ライフステージに合った女性の働き方

ここ数年は私の会社でも、ワーキングマザーが長期間働ける制度を選択できる仕組みが生まれています。

「キャリアランチ座談会」というものがありまして、これは実際に制度を利用している先輩ママ社員にお越しいただき、ランチをしながら、その体験談を伺うというもの。私も2、3回参加しましたが、「うちの会社でもやれるんだな」と心強く思いました。

ただそれも部署によりけりで、やはり第一線の営業職に身を置いて、制度を使うのはちょっと難しいかもしれません。

ただ、自分が望めば他の部署に異動して、会社が設けた制度を利用できるのは、大企業ならではのメリットではないでしょうか。大企業に

は、会社の中にいろんな部門があって、いろんな働き方ができます。その中で、自分が望むライフスタイルをベースに、「こんな働き方をしたい」という希望があれば、ここでは無理だけれど、あっちに異動すれば実現できるという柔軟性があるって、その時々合ったワーキングスタイルが確立しやすい部分があります。

もうひとつのメリットは福利厚生充実です。いま現在、それにお世話になっている私にとっては見逃せないポイントです。就活時の私は、企業選択をする上で福利厚生など重視していませんでした。ところがいざ、自分に子どもができてみると、経済的な心配をせずに子育てができるというのは大きな安心材料です。そうした意味でも、いずれ社会に出て働くグノーブル女子たちにも「福利厚生は要チェック」と言いたいですね。

女性の場合は、その時々で働き方が変わり、難しいところがあると思います。仮に同じ会社に勤め続けたとしても、20年、30年と長いライ



フステージにおいては、従事できる時間や内容が変わってくるもの。それは、私自身の6年間を振り返ってもよく分かります。

就活をしていた頃は、ずっと突っ走れるものだと思っていました。入社1年目の働き方のように、モチベーションさえあれば20年、30年走り続けられると思っていました。ところが、たった6年の間でも、そうは言っていられない変化がありました。だからこそ、その時々合った働き方を選択できる会社に入って良かったと思っています。

ハンドボール部 初のマネージャーとして

大学時代は、男子体育会のハンドボール部で4年間マネージャーをやっていました。高校の頃は私もハンドボールをやっていたのです。マネージャーになったきっかけは、プレーヤーの中に学芸大附属の先輩が多くいて、その方たちと高校時代一緒にプレーしていたこともあり、私もマネージャーとして入りました。

それまで東大の男子ハンドボール部にはマネージャーがいなかったのです、お手本があるわけではありません。部員たちも私にどこまでのサポートを求めているのか、最初は戸惑いもあったようです。すべてはゼロからのスタートでしたが、それはそれで楽しかったです。

私の学生生活は、ハンドボール部のマネージャーとしての活動が7割くらいを占めていたのではないのでしょうか。体育会なので、週5日、6日は練習日があって、当然マネージャーも練習に張りつきます。そんな毎日を送っていたので、登校する時はいつもジャージ姿でした(笑)。

私の気質的に、やるからにはサークルではなく、体育会でがっつりやりたかったのです。テーピングの講習会に参加してトレーナー的な仕事

もしましたし、大会の登録管理や合宿の手配など、主務として細々とした事務もやりました。やっていることは華やかではありませんでしたが、自分がそこにいる意義を実感することができました。

そんなハンドボール部にも、今はマネージャーが常に2、3人いるようです。おこがましい言い方をさせていただけば、自分の後に、きちんとした組織として成り立つような道筋をつけてきたという感じでしょうか。

東大なら やりたいことができる

大学4年間は本当に楽しく、充実していました。ただ、もっと勉強しておけば良かったとも思います。もちろん受けた授業は100%コミットしたと思っていますが、単位とは関係なしに、より多くの授業やゼミなどに参加をして、本腰を入れて勉強したかったなと感じています。

私は、多くの専門知識を身につけて社会に出たわけではありません。自分の興味のあることを、学生時代にもっと時間をかけて勉強していれば、社会に出てから自分がやりたいことを具体的に言えたのではないかと思います。もちろん今からでも遅くはありませんが、社会人になってしまうと、なかなか集中して勉強する機会が持てません。

それができるのが大学時代です。とくに東大には、「やりたい!」と思ったことには必ず応えてくれる先生がいらっしゃる環境があります。文学部の中に限らずとも、いろいろな分野の勉強をしておけば良かったと社会人になってから思うようになりました。

東大だけではなく、東京には素晴らしい大学がたくさんありますが、自分の母校ということでひいき目に考えてみても、本当にいいキャンパ



スだったと思っています。優秀な方も大勢いて、日本にとどまらず海外に出てやりたいことをやっている同窓生がたくさんいます。そうした仲間から刺激をもらうことも少なくありません。気が早い話ですが、自分の子どもにも東大を勧めたいと思いますね(笑)。

グノーブルは唯一無二の塾

私が通っていた頃のグノーブルはまだ小さな塾で、渋谷のビルの小さな教室で細々と学んでいました(笑)。ところが今は、新宿の教室は増えて、渋谷も移転して大きくなりましたし、御茶ノ水にも校舎展開をされていることを知って、少し感慨深いものがあります。

グノーブルは、熱心かつ親身に接していただける唯一無二のスタイルの塾だと思っていて、そのスタイルを私は非常に魅力的に感じていました。まわりには、グノーブル以外の塾に通う人もいましたが、私は英語の力が確実についていると感じていたため、他塾と比較するようなこともなければ、塾の規模が小さいから

とって不安を感じることもありませんでした。当時、学芸大附属の生徒は比較的多くグローバルに通っていたのではないのでしょうか。

私が好きだったのは、英文を語順のままに訳していく学習方法です。また、そうしたやり方で英文がどんどん読めるようになると、英語に接することがより一層楽しくなりました。この「楽しい」と思える気持ちですが、勉強の基本になることを知ったのもこの頃です。

現在の仕事の中でも、英語を読む機会は多々あって、グローバルの教えが役立っています。ビジネス文書には初めて見る単語が頻出しますが、そうした場合でも、単語のパーツを見て、前後の文脈から意味を推測しています。受験期に私たちが教わっていたのは、まさしく「使える英語」だったと、今になって実感しています。

育休後は 英語を武器に世界へ

英語を武器にすることができたことは大きな財産になっています。海外に進出するクライアントさまの支援など、かなり高度な英語が求められる仕事にも積極的にアプライできます。いまは育休中でコーポレート部門に籍を置いているのですが、育児が落ち着いたらまた現場に戻り、日本だけではなく世界をフィールドとした海外事案の仕事をしたと考えています。そうしたことに積極的に手を挙げて関わろうと思えるのは、やはり、高校時代にグローバルで培った英語力のおかげだと思っています。

先ほど大企業が良いという話をしましたが、海外へもリーチする仕事の幅があって、その仕事に携われるのも大きな企業の魅力のひとつです。そして、英語力さえあれば、そうした仕事を選択することもできる

のです。逆に、英語ができなければ、どんなに強い気持ちがあっても手を挙げることすらできません。育休後は、自分の英語力がどの程度通用するかを試してみたいと思っていて、いまから楽しみにしています。

影響を受けた先生の熱意

最後に、これだけは申し上げておきたいと思います。精神論的なことにはなりますが、ひとつのことに集中して熱心に取り組む姿勢を、私はグローバルの先生方の姿を見て学びました。今でも私のベースになっています。

熱意を持って仕事をする、育児をする、という基本的なモチベーションの高さも、この塾でお世話になって培われたものだと思っています。

先生方はいつも明るくて、常に体温が38度くらいあるような熱心さを感じました(笑)。「いったいどこからあのバイタリティが湧いてくるんだろう」と、よく友達同士で話していましたし、そんな先生方の熱意には、高校生ながらも影響を受け、授業に入る時は、「私もやるぞ」と決意を新たにしていたものです。先生が持っている「熱」というのは生徒のモチベーションを上げるためにとても大事な要素だと思います。

私はハンドボールをやっていたので、疲れて塾に来ることが多かったです。疲れているのだけれど、授業に入れば知的興奮が起り、いつの間にか時間が過ぎていました。教室を出る時はアドレナリンが出たような状態です。どんなに疲れていても元気をもらって帰る塾、それが私にとってのグローバルでした。

グローバル 10周年にあたって

10周年おめでとうございます。あらためてホームページで、「知の力を活かせる人に」という言葉を目にして、グローバルの卒業生として、とても共感を覚えました。

私自身、これからの人生の中で、ここで学んだ英語を活かせる人になりたいと思っています。また、その力を授けてくださったグローバルに感謝しています。

これからも、知の力を自在に使える方が、グローバルの卒業生の中から一人でも多く出て、世界がもっと面白くなっていけばいいなと思っています。そんな方をたくさん送り出していだけるよう、先生方には、もっともっとご活躍いただきたいと思っています。





グノーブルの「使える英語」、「生きた英語」の意味を、社会に出てから実感しています。

1期生 たきがわ ゆうすけ 滝川 祐侑 さん

日系金融機関勤務

《開成／東京大学経済学部》

M&Aという仕事について

東京大学経済学部を卒業後、日系の金融機関に就職して6年目になります。仕事の内容は、クロスボーダーを含む企業のM&Aを担当しております。今年(2016年)の6月まではロンドンにて勤務していました。

グノレットを読む方々の多くは、高校生や中学生も多いと思いますので、まず、「M&Aとはどんなものか」を簡単に説明します。

たとえば、あるメーカーが新事業分野に進出するとしたら、二つの事業展開の仕方があります。一つは、自社工場を建て、そこで人を雇って事業を運営するというやり方。ただしこれは工場建設や人材採用などに長ければ数年といった時間がかかってしまいます。そこで、二つ目として挙げられるのが、すでに新事業分野の生産能力を持っている会社を買収し、より効率的に、かつスピーディーに事業展開するというもので、これがM&Aです。なお、これ

が異なる国の企業間で行われる場合、たとえば日系企業が海外企業を買収する、あるいはその逆のケースをクロスボーダーM&Aと呼びます。

当然ながら、M&Aを実行するには、多額のお金が必要です。そこに融資をするのが我々金融機関の仕事であり、私もそのチームの一員としてさまざまな企業をサポートしております。

海外勤務の評価軸は TOEIC 900点

私は28歳ですが、この年齢で海外勤務を経験するのはおそらく早い方だと思います。実際、これまでの日本企業の慣例としては、国内でいくつかの部署を経験して、海外勤務の辞令を出すのは早くとも30代が一般的だと聞いていました。ところが、今は多くの企業で、若いうちから海外勤務を経験させ、国際化の波に対応できる人材を育成しているという傾向が強くなっているよう

です。おそらく、いまグノーブルに通っている後輩の生徒さんが社会に出る頃には、この傾向はさらに加速しているのではないのでしょうか。

まず評価されるのは英語力です。ほとんどの企業でTOEICの点数はひとつの評価軸になっています。TOEICの点数が900点を越えていれば、海外勤務のチャンスは広がるはずですが、実際に私自身が入社したとき、「将来、海外勤務を希望するなら900点をとりなさい」と言われ、新人の秋にその目標を達成しました。

また、グローバル化が進む現在は、どこの部署にいても海外とのやり取りが必ず発生します。そうした機会に積極的に手を挙げて、関わることも非常に大事です。また、日頃から海外で勤務したい旨を周りに言うことも大事です。

戸惑いを感じた コミュニケーション方法の違い

日本と海外では同じ業務に携わっ

たとしても、法制度や会計制度の違いがあり慣れるまで当然苦労します。私もロンドンに着任する際、その点は苦労するだろうな、と思っておりました。ただ実際行ってみて、そういった実務面以上に、コミュニケーションの仕方の違いに戸惑うことが多々ありました。

その1つがアイスブレイキングです。初対面の人と会ったときは「How do you do?」とか、「Nice to meet you.」から会話が始まるわけですが、日本人はそこから先のスモールトークがなかなかうまく続きません。形式的な自己紹介は記憶に残らないため、ここでちょっとした「会話のひねり」を挟み、コミュニケーションをとりやすい雰囲気作りをすることが大事です。これはいまだにあまり得意ではありません。

さらに、日本では上司に対して「〇〇さん」とか「〇〇部長」と呼ぶのが当然ですが、欧米では、基本的に全員ニックネームやファーストネームで呼び合います。ここから生まれるフラットな人間関係がポイン

トで、彼らは上司・部下関係なく、堂々と意見をぶつけ合います。私自身、現地採用の入社1年目の同僚が、物怖じせず部長に意見するのを見て、驚きました。その点、コミュニケーションについては色々な方法があり、単純に「英語を勉強する」というだけでなく、こういった点も着実に学んでいかなければ世界では通用しないんだな、と強く実感しました。

社会に出て実感できた グノーブル効果

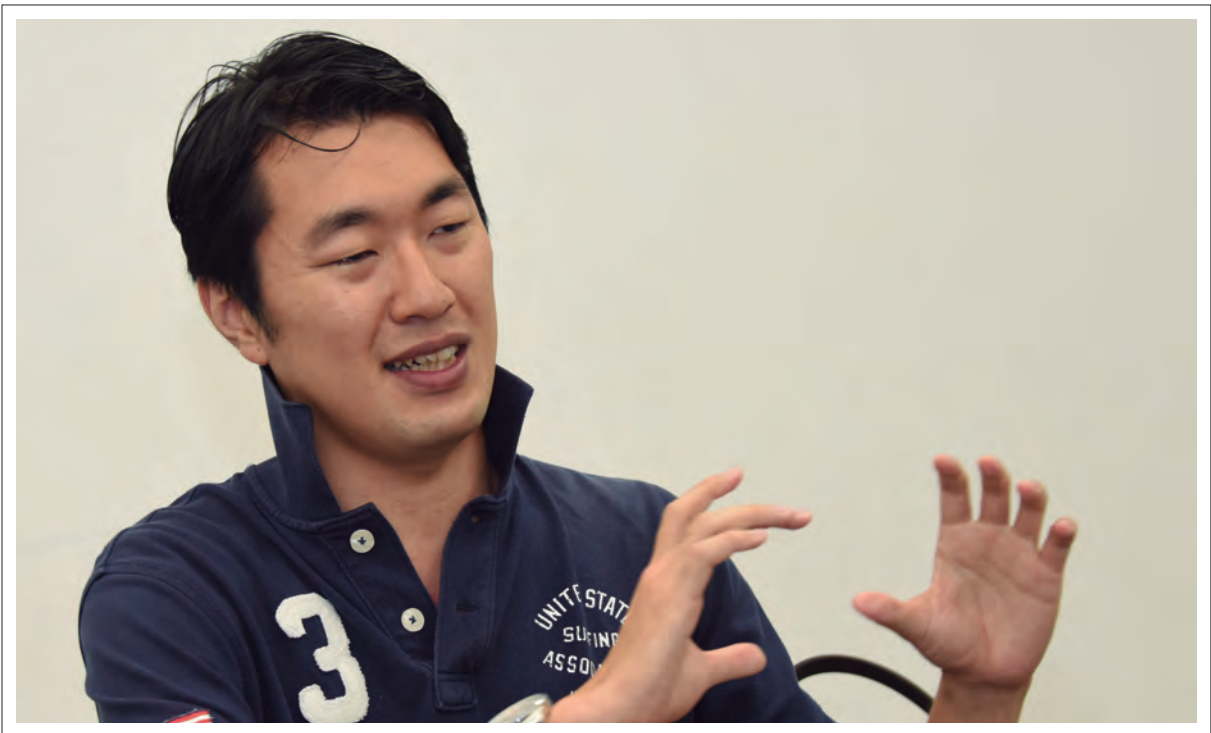
海外に勤務しているか否かによらず、ビジネスマンの多くは、英語を使う場面に必ず遭遇していると思います。私の場合、こうした業務ビジネスで使う英語力のボトムになっているのがグノーブルで学んだ英語です。

グノーブルでは、英語の文章を語順通りに前から読むことを学びました。当時は、「こんな読み方もあるのか」という驚きしかありませんで

したが、実際にビジネスで英語を使うようになると、その力がないと仕事ができないことが分かりました。それに気がついたとき、本当にグノーブルで英語を学んで良かったと思えました。

グノーブルで学んだことで、もうひとつ役に立っていることがあります。それは、英単語を分解し、語源までさかのぼって意味を知ること。そこから派生的にその周辺の言葉を理解し、語彙を増やしていくというやり方です。大学受験では、高度な文章を読むために語彙を増やす必要がありますが、ビジネス英語になると、さらに専門性の高い言葉がたくさん出てきます。僕のなかに今でも、グノーブルで学んだやり方が染みついている、たとえば初めて見る専門用語だったとしても、単語を頭の中で分解し、大まかに意味を理解することができます。

正直なところグノーブルで言われていた「使える英語」、「生きた英語」という言葉の本当の意味を、社会に出て、実際に英語を使うようになって



て身をもって実感したのです。

ビーチラグビーに 打ち込んだ学生時代

学生時代は、「ビーチラグビー」のサークルに入って、真っ黒になりながらやっていました。もともとこのスポーツは、ラグビー選手がオフシーズンに取り組むスポーツです。私の所属したサークルはラグビー経験がない人たちが、1年間の練習を糧にして、夏のシーズンに本物のラグーマンに挑むということをやっています。一般的にはあまり知られていませんが、日本全国で数百のチームがあり、地方大会を勝ち抜いたチームが7月末に平塚の浜辺に集結し、日本一を目指して戦います。私が出場した4年生の全国大会ではベスト8でしたが、過去に2度、東大が優勝したこともあります。

大学時代には何かひとつ、寝食を忘れるくらい夢中になれることを探すべきです。部活やサークルでもいい、勉強でもいいと思います。4年間、それをやり遂げたところで絶対に得られるものがあります。「オレはこれをやったんだ」という自信になるはず。その自信は学生生活を終えた後の人生で、きっと役立つはず。

海外に飛び出して 見聞を広めよう

もうひとつ学生時代に貴重な体験をしました。大学生が海外の人たちと交流し知見を深めよう、という経団連主催のプロジェクトに2回ほど参加する機会に恵まれました。

1回目はタイのバンコク、2回目は中国の大連。どちらもグループリーダーを務めたのですが、本格的な海外はほとんど初だった私は、多くの刺激を受け、勉強になりました。特に、タイのバンコクで優秀な



大学生たちとグループワークをしたとき、彼らが流暢な英語でスピーチしているのを聞いて、「これはヤバイな」と衝撃を受けました。

今、中学生、高校生の人たちも、学生時代に、ぜひ、積極的に海外に行って欲しいと思います。もし私が大学生に戻れるのなら、留年してでも最低1年間は留学したいと思います。社会人になるとさまざまなバックグラウンドの人に出会いますが、留学した人の話を聞くと、異国の地で成功および苦労を含む経験を積んでいることを羨ましく思います。英語力だけでなく、海外での経験に基づいた人間としての厚みがあるように感じるのです。

私が知る限り、学部生に対して積極的に留学を推奨する仕組みが、東大にはあまりないように思えます。自分から主体的に留学プログラムを探して、時間がたっぷりある大学時代を活用して、ぜひ世界に飛び出してみてください。

やがて直面する 就職活動について

グノーブルで学んでいる皆さんの多くは、これから大学に入って、ゆ

くゆくは企業に就職される方も多いと思います。そこで私からの就職活動についてアドバイスがあったら、できるだけ幅広い業種のたくさんの方々に、直接話を聞いた方がいいということです。

就活時期というのは、いろいろな会社で活躍する方から直接話を伺える、人生で一度きりのチャンスです。私も、金融から商社やメーカーと幅広い業種の多様なポジションの方に直接お会いして、さまざまな貴重な話を伺いました。それぞれ皆さん、ビジネス経験が豊富で、その経験から得た哲学、考え方を持っていて今の仕事に打ち込んでおられました。そうした血の通った話は、会社説明会などではなかなか聞くことができせん。OB訪問、OG訪問は、ぜひ積極的に行うことをおすすめします。伺った話の中から、「これをやってみたい!」と思える仕事が見つかる可能性もあると思います。

10年前から王道だった グノーブルの英語

私が通っていた頃のグノーブルは、設立されたばかりの小さな塾でした。塾の選択肢は他にもあったの

ですが、私自身、グノーブルの授業のやり方に強い信頼感がありました。単語帳を渡されて「明日までに覚えてこい」というような授業ではなく、毎回授業の最初に要約問題の小テストがあり、そこから授業が始まっていくというやり方に私は魅力を感じていました。さまざまな知識を、受験問題を攻略する小手先のテクニックとして教わるのではありませんでした。根本的な英語力を高められて、それが、受験問題を解く力にもつながったと思っています。

当時学んだことは、今でも活かしています。たとえば、英語の文章を前から読んで意味をとっていくことは、英語に関係ある仕事に就く上で当たり前にはできなくてはならないことです。グノーブルの英語は、まさしく王道だと思います。グノーブルで学べたことで、働くため、生きるために使える英語の基礎が培われたと思っています。

要約のスコアアップは英語力が伸びている証し

今思い返すと、グノーブルでは大学の授業とほぼ同じレベルの英語を学んでいたように思います。私が在籍していた頃の東大の教養課程で

は、『The Universe of English』というテキストを読む授業がありましたが、「グノーブルでやってきたことと一緒に」という印象で、あまり苦労しませんでした。

グノーブルの生徒参加型の能動的な授業も心に残っています。授業を受けていると、先生が頻繁に当ててくださるため、生徒がアクティブに参加することを求められます。そこが私にはすごく刺激的でした。また、分からないことがあれば、その場ですぐ質問でき、解決していただけたため、非常に効率的でした。

一番記憶に残っているのはやはり要約問題です。グノーブルの要約問題で求められるのは、英語力だけではなく、読解力や表現力、論旨をコンパクトにまとめる力など、いろいろな能力が試された気がします。私は話が冗長になる傾向があるからか(笑)、初めのうちは全く歯が立たず、スコアを上げるのに、ずいぶん時間がかかりました。そのスコアの上昇が、間違いなく、英語に対する自信につながったと思います。

要約問題を受験英語の中の one of them と考えて、あまり時間を割かない塾もあると思いますが、私の場合は要約問題から学んだことがたくさんあります。もしそれがなかった

としたら、今頃どうなっていたらろうという気もします。

音読は普遍的な学習方法

英語力を伸ばすことは、これから皆さんの可能性を拓けることに繋がるのは間違いのないと思います。グノーブルのやり方を信じて、それをきっちりやっていけば、大学受験ではまったく心配はありません。

また、グノーブルのやり方は、社会に出てからも通用します。たとえば、そのひとつとして挙げられるのが音読です。社会人6年目の今でもさまざまな形で英語を勉強しているのですが、英語に堪能な多くの方が音読をスタンダードな勉強方法として実践されていることに驚きました。私は、英語を引き続き最優先で勉強するものとして認識しており、音読についても、毎日細切れの時間を見つけてはボイスレコーダーを使って行っています。

グノーブルで学んだ語順のままの英語の読み方、要約するときの俯瞰的な見方、音読や単語の覚え方といった学習方法は、実は普遍的なものであり、大学生であろうと、社会人であろうと、基本的なやり方は変わらないと考えています。

グノーブル 10周年にあたって

10周年、おめでとうございます。私が通っていたころは、渋谷の教室は小さなビルのワンフロアに、小さな教室が2つしかなく、そこに、先生と生徒の熱気があふれていました。今の充実ぶりは、やはり、グノーブルのやり方が正しいことの証明だと思います。先生方のますますのご健闘、そして時代にも合った教育の場としてのグノーブルのご発展を心よりお祈り申し上げます。





いまでこそ、英語を公用語として研究していますが、もともとは、英語は得意ではありませんでした。

2期生 ^{たにうち りょう} 谷内 稜 さん

東京大学大学院 理学系研究科 物理学専攻(博士課程)
日本学術振興会 特別研究員
《神奈川県立多摩／東京大学理学部》

実験と理論、物理学の「二つのカテゴリー」

5年前、グノレットに登場※させていただいたのは、iGEMに参加した翌年のことでした。当時は東大の4年生でした。その後、そのまま大学院に進み物理学を専攻し、現在は、博士号取得を目指しています。

今日は久しぶりにグノーブルの後輩の皆さんにメッセージをお伝えできる機会をいただきました。できれば物理学に興味を持っていただいて、「自分でもやってみたいな」と思えるような話ができればと思っています。

まず、物理学の全体像からお話します。物理学は、大きく分類して「二つのカテゴリー」があって、さらに各々のカテゴリーの中に「二つの役割」があります。

二つのカテゴリーについては、「宇宙や素粒子、原子核などの物質」の根源を探っていくものと、「超電導などの物質の物性」を物理的に理解していこうというもの。今、僕がいる研究室では、原子核の構造を実験

的に見る研究を行っています。

役割の違いは、「実験をする人」と「理論を研究する人」の2つです。「実験」と「理論」で最も大きな違いは、プロジェクトに関わる研究者の人数です。理論はせいぜい2、3人。いわゆる個人プレー的な側面が大きいといえるでしょう。それに対して実験は、平均数十人が関わるチームプレー。ヒッグス素粒子などのビッグプロジェクトになると、その数は数千にも及びます。

大学院で実感した世界の広さ

日本の大学は圧倒的に日本人学生が多く、国際化が進んでいるとはいえません。それは東大も然りです。ただ、逆説的にいえば、母国語で授業が受けられる国は世界的には少なく、それが特長であるとも言えるでしょう。

ところが、大学院に進むと共同研究する外国人が途端に増え、公用語は英語になります。僕が所属している研究グループでは日本人の割合は

1割程度。そのことに、最初はかなり戸惑いました。

僕は海外に行った経験が少なく、iGEMの 때가初のアメリカでした。したがって、英語の読み書きはグノーブルでみっちり学んできたものの、コミュニケーションの道具として英語を使うためには、違うステップの必要性を感じました。もちろん、そのステップに進んでも太刀打ちできたのは英語の土台が築

※2010年11月、マサチューセッツ工科大学で行われた合成生物学コンテスト(iGEM)において、谷内稜さん(東大理学部物理学4年)、亀井亮祐さん(東大医学部医学科4年)、半田剛久さん(東京医科歯科大医学科4年)を主要メンバーとする東大チームの研究が銀賞を受賞。グノレット5号、6号にて「グノOB緊急座談会」として、その詳細をご紹介します。座談会には、iGEMには参加されなかった森田悠介さん(東大理学部物理学4年)も加わり、「受験時代とグノ、そして今の僕たち」をテーマに、さまざまなエピソードをご紹介します。

(学年は当時のもの。)



けていたおかげですが、やっぱり喋ることに最初は苦戦しました。それでも、5年間も外国人と一緒に研究をしているので、今では普通に冗談を言い合えるくらいにはなっています。

また、さまざまな国の「頭脳」と出会ってきて、「世界は広い」と実感しています。東大にも優秀な人は多いですし、とても良い大学だとは思いますが、その分野ごとに、世界にはさらに優秀な人がいて、なんと…、「東大も普通の大学だな」と思うってしまうのです。

各国固有の文化的なバックグラウンドがあって、それぞれに生き方違って違う。そうした人たちと話すのはとても刺激的です。自分がいかに日本の中でしかものを考えて来なかったかを感じさせてくれるきっかけにもなりました。

物理学で追いかける 二つの興味

大学院で僕が見ているのは原子核という物質です。光の速さ近くまで加速させた原子核同士をぶつけると、普通では存在しえない原子核の形が生まれます。そこで、「なぜ、こうした形が生まれるのか」を分析

するのが、いま僕が携わっている研究です。

通常、原子核は陽子と中性子が団子状の球体になっていると安定と考えられます。自然界に存在する安定なものには陽子と中性子の質量がだいたい1対1。ところが、中性子がとても多くなった原子核を観察すると、本来、団子状のものであるはずの原子核が、ラグビーボールのような楕円形になっていることがあります。そうした、本来はあり得ない現象がなぜ起きるのか。そこに視点を向けて考えることが、今は純粋に面白いと思っています。

もうひとつ、もっと身近な宇宙の成り立ちを例にとって僕の興味を説明しますと、ビッグバンによって宇宙が出来た時は、水素しか物質は存在しませんでした。そこから水素と水素が融合して、どんどん新しい物質が生まれていった。そのプロセスには、中性子がとても多い原子核が鍵になっていることが分かりました。今の宇宙はこのプロセスによって100種類以上の物質で構成されるようになったと考えられています。その鍵となる原子核の性質を探ってみたいという欲求があります。

つまり、原子核の形状変化に対する純粋な物理的疑問と、もうひとつ

は元素合成の成り立ちに対する興味から、今の研究・実験に取り組んでいます。

分からないことを解決すると、さらに先が見えてきます。科学の歴史はその繰り返りで発展してきました。ニュートンは、科学者であり自然哲学者でもあるロバート・フックに宛てた手紙の中で、「科学というのは巨人の肩に乗ることだ」というニュアンスの言葉を記しています。

つまり「巨人」というのは、多くの先人たちの知の積み重ねのことで、その肩に乗って、巨人よりも少し高い目線からものを見ると、新しい発見がある。つまり、どんどん分からないことが増えていくのが科学です。おそらく、少なくとも今後100年は分からないことが尽きないと思います。それを理解しようとするところに物理学をはじめとした基礎科学研究の面白さがあります。

知的好奇心の赴くままに

科学者というのは、自分が面白いと思うことを見つけて、それを研究していれば成り立ってしまう不思議な職業です。もちろんその過程でたくさん発見があって、その発見が人の役に立つこともあります。

たとえば、皆さんがよく知っているレーザーポインターの「レーザー」は、もともと、「メーザー」という強い電波の発見がベースになっているんです。

1950年代に、「メーザー」という強い電波の存在が量子力学によって予想され、理論通りに実験が成功しました。しかし、そこで科学者は、「同じような現象は光でもつくれるはずだ」と仮定して、「メーザー」と同じ現象を光で再現したのが「レーザー」です。当然ながら当時の科学者は、その発見が、後年、レーザーポインターを生むなどは考えておらず、単にその現象に興味を抱き、

光を使って似た現象を再現したに過ぎません。

つまり、研究に取り組む科学者は、「社会のために役立つものを生み出そう」と思って研究しているのではなく、自分が面白そうだと思うことに取り組んで、その結果として、社会の役に立つものが生まれることもあるということです。いわば、知的好奇心の赴くままに研究に没頭して、知的なプロセスだけしかやらない職業、それが科学者なのです。

ただ僕の頭の片隅には、「100年後の誰かが幸せに生きるために貢献できるかも知れない」という思いもあります。だからこそ僕は、自分が面白いと思うことを、貪欲に、まっすぐに突き詰めているのです。

iGEM で考えた 「自分らしい生き方」

大学時代を振り返って、僕にとって最大のイベントはやはり i G E M でした。スタートしたのは僕が大学 2 年生の夏休み。3 年生からどの学科に進むかを考え始める「進学振り分け」の時期です。その頃の僕は、物理学を念頭に置きながらも、「人のためになる科学ってなんだろう」ということについて悩んでいました。

そんな時に、i G E M に出会ったんです。i G E M の研究は、大腸菌に、ある機能を持った遺伝子を組み込んでやると、大腸菌がその遺伝子のプログラムに従って動くようになる。つまり、生物版のロボットがくれるんじゃないかという発想が原点にありました。まさしくそれは、科学を役立たせる応用分野の研究で、そうしたものに触れてみたいと強く思いました。

当時一緒に i G E M に参加した亀井くんと半田くんも、医学部に進んで悩んでいました。臨床医になって、目の前の患者さんを救う道に進むべ

きか、それとも研究医として応用研究に進むべきか、あるいは基礎研究に進んだら良いのかと。

そんな 3 人の悩みが共鳴して、「じゃあ i G E M を一緒にやって、研究者ってどんなものかを体験してみよう」ということになったんです。

僕ら 3 人に共通していたのは、敷かれたレール通りに進むことが、「本当に自分らしい生き方なのか」という疑問を持っていたところでした。自分にはもっと、自分なりの強さがある、それを活かす道が他にないんじゃないかと。だからこそ、まずは何か 1 つ目標を持って突き進み、自分を試してみたいという気持ちになったんです。

iGEM で見つけた 自分の原点へ

i G E M をやって、「研究って甘くないな」と感じました。「これなら必ずいけるはずだ」と思った設計も、多くの場合計画通りにいきません。そこから設計の見直しが始まるのですが、それがすごく苦しいんです。

悔しかったのは、すごく苦しんで一週間もかけて見直し、解決してみたら、「こんな単純なことで躓いていたんだ」ということが多々あった

ことです。それは今の研究でもまったく同じで、「なんでだろう」を積み重ねて、その都度検証し直して、ようやくひとつの答えが導き出される。そんな研究の辛さを大学生のうちに経験できたのは非常に良かったと思っています。

そして僕は、i G E M を経験した上で、応用分野には進まずに基礎研究の道を選択しました。もともと僕は基礎研究を志していたので、自分の中では矛盾はありません。「知らない世界を見てみたい」という気持ちから i G E M で応用の研究に参加しました。つまり、応用分野の研究がどんなものかを知った上で、基礎研究をやってみたかった。井の中の蛙になりたくなかったんです。

確かに i G E M での活動は、仲間にもまれて研究がすごく楽しかったけれど、その経験を経て、そもそも僕の興味は、未知の現象、「物質の原理を探ってみたい」という思いが起点になっていたことを改めて認識できました。

また高校生の際に、東大を目指した理由も、「東大で物理の研究をやりたい」という気持ちが原点になっています。その原点に立ち返った時、「やっぱり物理学の基礎研究をやらなきゃ」と思ったんです。





切磋琢磨した仲間たちの今

一緒に i GEM をやった亀井くん、半田くんは、医学部を卒業する直前も、大学院に進むか、研修医として医療現場で働くかで悩んでいました。しかし、人の身体について研究するにしても、少しでも患者さんと触れ合って、いろんな経験を積んでから研究をやった方がきっと自分のためになるだろうと、とりあえず2人とも前期研修には行きました。

その後、亀井くんについては、おそらく今は後期研修医として病院勤務しているはず。一方の半田くんは、後期研修には行かずに一旦臨床医としての活動はストップして、いまは東京医科歯科大の大学院に所属しながら脳神経科学の研究をしています。

あと、i GEM のメンバーではありませんが、以前グノレットと一緒に登場した森田くんは、僕と同じ物理学科に進み、「物性」の実験をしています。彼はとても優秀な人で、どんどん研究を進めていたのですが、運よく助教のポストが空いて、

今はその椅子に収まっています。

もちろん羨ましさも感じますが、助教のポストはなかなか大変です。立場的には先生になるわけで、学生への指導義務も発生するため、その分、博士号をとるための研究論文を書く時間も圧倒的に少なくなります。そんな中でも彼は研究を疎かにすることもなく、アクティブにバリバリやっています。

自分の力不足を さらけ出せた、グノの授業

グノーブルでは、とりわけ、優秀かつ努力家の仲間が存在が魅力的でした。授業中に生徒を当てて発言させる。これはグノーブルならではの特長のひとつです。その時に、まわりの人たちの賢さが見え隠れして、とても刺激的でした。

亀井くんや半田くん、森田くんなどがまさしくそうです。そんな仲間たちと切磋琢磨するきっかけが得られたことが大きかったです。もちろんそうした環境であったのは、皆が引き寄せられるような授業をしてく

ださった先生の力が大きかったと思っています。

ただ、中山先生の授業は、自分の力不足をさらけ出さなければならぬところがあって、最初のうちは当てられるのが少し怖かったです(笑)。この生徒は、どこまで理解しているのか。それを先生はお見通しです。ただ僕としては、それを簡単に認めたくない。でも、授業中に当てられてしまうと、認めたくない部分が明らかになってしまうのです。

いまでも、英語を公用語として外国人と一緒に研究していますが、もともと僕は、英語が得意ではありませんでした。なにしろ英単語の暗記が嫌いで、苦手意識を持っていたんです。

その点、グノーブルの英語には、「ただ覚える」という単純作業はありません。自分の実力や勉強に向かう姿勢などを暴かれながらも、どんどん実践を積み重ねていくうちに確実に力がついていくと思います。

他の塾のことは分かりませんが、単語帳でバンバン単語を覚えさせられたり、ガリガリ問題集を解くような塾だったら、僕の英語は全く伸びていなかったと思います。

高校生は十分に大人だと思いますが、新しい言語を学ぶ上では赤ちゃんのようなものです。赤ちゃんが言語を学んでいく過程では、黒板や問題集を使うわけでもなく、経験的に習得していきます。グノーブルでは、もちろん黒板もテキストも使いますが、よりナチュラルな方法で経験を積み重ねることで英語が学べました。暗記という単純作業が嫌だった僕には、ぴったりの塾でした。

グノーブルで 会話の土台を築けた

研究をする上で大切なのは、人の書いた論文を読んだり、自分で書いたりすることです。実のところ、研

究論文の英語はさほど難しい文法は使いません。新聞や雑誌の方が複雑な言い回しがたくさん使われています。論文の場合はできるだけ簡潔に書いていくことが大事で、専門用語を除いては、読みやすいし書きやすい文章です。

ただし、ネイティブが書いた論文は全く違います。中でも、イギリス人はまわりくどい書き方をします。イギリス人がfirst author（筆頭著者）になると、「～というわけではないとはいえないかもしれない」といった書き方が出てきてとまどうこともあります。

また研究論文は説明すべきことが多いので、イギリス人でなくとも、ひとつの文章に修飾語句が延々と続く長いものになりがちです。ですから、論文を読む場合、いちいち返り読みなどしていたら理解できません。グノーブルで身につける「語順のまま解釈していく」読み方が大いに役立ちます。

もうひとつは会話です。もちろんグノーブルでは会話の訓練をしていませんので、コミュニケーションの場数を踏むことが必要です。最初のうちは、まず頭の中で英文を考えてから、「よし、いくぞ!」という感じでした。ただ、場数を踏んでいくと外国人と話すことに躊躇しなくなります。気持ちの鎧がとれるというか、「恥をかいてもいいじゃないか」と思えるようになるんです。相手にしても、英語以外にコミュニケーションをとるツールがないのだから理解しようとしてくれる。そこに気づけてリラックスして話せるようになりました。

帰国子女だったり、留学経験でもない限り、ほとんどの場合は僕と同じように場数を踏んで会話に慣れていくのだと思います。ただ残念なのは、多くの日本人は、英語の文法がめっちゃくちゃなことです。

それはおそらく、英語を返り読み



する癖がついていて、SVOC等の関係がきちんと身につかないまま英語を習ってきたからです。僕はグノーブルで前から読み書きすることに慣れていたので、英語の自然な流れが身につけていて、正しい英語の語順で表現していくことは普通でできていると思います。

グノーブルの授業では、英語を僕たちが解釈していくときに、英語の流れに沿って先生が合いの手を入れてくださっていたのをよく覚えています。その感覚が僕の中にはずっとあって、英語を話す時はまず最初に結論を言ってから、「それはね～」と文を続けられるようになっていたんです。

高校生の時は、外国人と対等に話せるようになるとは夢にも思いませんでした。それが今こうして話せているのは、グノーブルの学習の中で、無意識のうちに会話の土台も築けていたからだだと思います。

グノーブル 10周年にあたって

10周年おめでとうございます。改めてグノーブルのことを思い返してみますと、先生が一方的に授業を進めるのではなく、生徒とやりとりしながら授業が進んでいくこと。そして、そんな授業が刺激的で面白いと思う優秀な人たちが集まって、お互いに切磋琢磨できる環境だったと思います。

僕がグノーブルに入った時は、渋谷の片隅の小さなビルで、生徒が肩を寄せ合うようにして勉強していました。正直なことを言うと、「こんな劣悪な環境では、皆いやになっちゃうかも」と思っていました(笑)。ところがその後10年も継続されて、多くの校舎もでき、グノレットのような冊子も出されるようになっていきます。それは、グノーブルは良いと思っている人が増えている証ではないでしょうか。ここから先の10年も、更なる成長を遂げていかれることを願っています。ぜひ、20周年企画にも呼んでください。後継者を育ててゆったり隠居生活をしている中山先生と、またお会いしたいと思っています。



**リアルタイムでリズミカル。
ネイティブのように英語を
理解する力は、グノで身に
ついたと思います。**

5期生 たまみつ みつ 末侑 さん

University of California, Los Angeles,
Electrical Engineering 専攻, Ph.D. 課程 進学
《東京学芸大附属／東京大学理学部／東京大学大学院理学系研究科化学専攻 中退》

グノの英語が 僕のベースになっている

この9月からカリフォルニア大学ロサンゼルス校 (UCLA) の大学院で、電気工学のPh.D. (博士号) 取得を目指しています。その前に「一度グノに行かなきゃ」と思っていました。普通、塾って、大学受験期の一過性のものだと思いますが、僕にとってのグノはそうではありません。

英語は今の自分にとって必要不可欠なツールになっています。英語の能力が高くなければ研究に関する論文も読めないし、自分で論文を書いて発表することもできません。グノで培ったネイティブのように英語と向き合う力が僕のベースになって、そのおかげで研究者としてのスキルアップをスムーズに行え、その結果として、海外の大学院への留学にもつながったことは間違いありません。

日本での学問の追求を一度区切り、改めて自分のこれまでを振り返った時、「グノで学んでいてよかった」という感謝の気持ちが改めて湧

いてきました。皆さんおっしゃるのですが、先生との距離がとても近く、深いところまで面倒を見ていただけました。何よりも、今の僕にとってなくてはならない英語力を授けていただいたことにお礼を言いたいと思ひ、今日は伺いました。

研究者になるための英語力

実は大学4年生になるまでは、さほど英語の大事さを認識していませんでした。1、2年生のうちは、とりえず授業の英語をこなしている程度で、3年生では英語の授業はなく、自分から積極的に英語に取り組むようなこともしていませんでした。4年生になり、気づいたので。英語の力がなければ研究者としてやっていけないと。

もちろん学部や研究室によっても違いはあるでしょうが、理学部化学科で僕が入った研究室では、英語ができなければ話になりませんでした。研究室の教授自身が最近まで海外で研究していたことや留学生を積極的に受け入れていたこともあり、

日常的に英語に囲まれているような環境でしたので、それまでの3年間とは英語に対する考え方が劇的に変わりました。

それでも、その環境に短期間のうちに馴染めたのは、グノで生きた英語を学んだおかげだと思います。もし僕が東大入試を突破するためだけの「受験英語」に取り組んでいたのなら、英語を読むにしても書くにしても時間がかかり、必要な情報も深く理解することができず相当苦労したのでは、と思います。肝心の研究に打ち込む以前に、英語を何とかしなきゃならない次元で。事実、僕のまわりの東大生でも、そうした人が少なからずいました。

科学を研究する上では、英語ができないことは致命傷になりかねません。研究者が必要とすべき英語のレベルに達する前に、ベーシックな英語力を身につけ直して、そこからさらに専門性を持った英語を積み上げていくとなると、研究以前の段階で大きく時間をロスしてしまいます。

グノでネイティブのような英語脳を徹底的に鍛えていただいたおかげ

で、ベーシックな部分はさほど苦勞することなく、高度な専門性を持ったサイエンスの英語にも苦手意識を持つことなく、研究者としての道を歩み出すことができました。

光工学との出会い

大学3年生までは、化学の基礎的な理論を学びながらさまざまな実験を行っていました。実はこの頃、一度民間企業への就職を考えたことがあります。というのも、僕はどうも化学の実験が好きになれず、向いていないんじゃないかと思ったのです。そこで、いっそのこと理系職ではなく文系職を視野に入れて就職しようかと真剣に考えました。

ところが、いざ企業への応募書類を書こうとしても志望動機がまったく浮かばなかったんです。また、「せっかく理系にきたのに」という思いもあってなかなか決断できずにいました。そうこうしているうちに4年生になってしまい、今の研究室に配属されて、光の物理的性質を利用した技術の開発を行う「光工学」という分野に出会いました。その時、「これは面白そうだ！」と思い就職を白紙に戻しました。それから大学院での研究も含めたこれまでの間、「レーザー光線を使って高速現象をいかに捉えるか」という技術の研究開発を行ってきました。

世界をリードする 海外の研究機関で

僕のようにわずか1年で大学院を中退してまで海外の大学に学位留学することを疑問視する人もいるでしょう。まして東大の場合、師事する教授も環境も日本で学ぶ限り申し分ありません。

しかし、どのような分野でも研究というのは、一般的に世界の人々が競争相手になります。世界最先端の

頭脳を持った人たちが、どれほどクリエイティブなアイデアで、どのようなチームワークで研究をしているのかわからないまま日本で研究していくことに、焦燥感を覚えています。

海外の研究機関は、国を問わず世界中から優秀な人たちを集めています。そして、そんな人たちが最先端の研究を行いながら世界のサイエンスをリードしています。どうせやるなら、そうした環境に早くから身を置いて経験したい、自分を成長させたい、という気持ちが抑えきれなくなったのです。



もちろん東大の研究室にも優秀な人はたくさんいます。でも、より多くの国の、しかも考え方の枠組み自体が違う人たちと数多く触れ合って、多角的なものを見方ができるようになることが、日本の研究者にも求められるのではないかと思います。

UCLA でどのような研究に携わるかは決まっていません。これから僕が所属する研究室では、携帯型の顕微鏡技術の開発などが行われています。顕微鏡といっても、理科の実験で使う覗き込み式のものやレーザーなどの大掛かりな装置を使ったものではなく、手に収まるほど小さな機器で、細胞より小さなナノレベルの物をも拡大視できるものです。

簡単に持ち運べるので、たとえば、資源の少ない発展途上国や避難所で飲み水などの検査に役立っています。このような世界規模で役立つ技術の開発に僕も貢献したいです。

アメリカの大学院に 進むには

アメリカの大学院に進むには、まず日本の国や財団が公募している給付型の奨学金を取っておくことをおすすめします。アメリカの博士課程の学生は、教授が授業料や生活費を負担することになっているので、学生を一人受け入れることでもかなりの金銭的な負荷となります。留学生自身が奨学金を持っていることで教授の負担が軽くなり受け入れてもらいやすくなるのです。

あとはもちろん、自分の研究成果です。学生の能力を量る指標としては、学会発表や専門雑誌への投稿論文の実績などさまざまありますが、一般的に最も高く評価されるのが投稿論文です。多くの場合、論文は複数名での共著になりますが、その中でも first author（筆頭著者）の論文を持っているとより有利です。ただ、学部生としての短期間のうちに first author としての実績を挙げるのは難しいと思います。僕が first author の論文を出せたのは、できたての研究室でこれから新しい技術をつくっていきこうという時期だったことも幸いしていて、運が良かったです。ちなみにテーマは『世界最速の連写速度を持つカメラの開発』というもので、英語で執筆しました。

そして、決め手となるのが、留学先として興味を持っている研究室の教授とメールでコンタクトをとり直接会いに行くことです。奨学金、実績、TOEFL や GRE（英語の世界共通試験）での高得点を準備し実際に応募したとしても、世界トップの大学の教授となると、世界中から膨

大なる数の応募書類が寄せられてきています。その中から確実に自分のものを選んでもらうためには、事前に教授と直接面会し印象づけておくことが重要です。そこで教授に気に入られておけば、選考が有利に進む可能性がぐんとあがります。

教授のメールアドレスはホームページを見れば知ることが出来ます。ただ、必ずしも返信があるわけではありません。僕の周りには博士課程でアメリカに留学していた研究者の方が多くいらしたので、メールの書き方などについてアドバイスを受けられました。返信がなくてもあきらめずに送り続け、ようやく訪問のチャンスを得ました。海外大学院に留学しようと思うと、かなり周回準備が必要になると思います。

英語の基盤は人生を左右する

以前、グノレットの「帰国生座談会」※の時にもお話ししましたが、僕は帰国生で、高校の頃は英語でそこまで苦労することはありませんでした。そう言う、「元々英語ができたのでは？」と言われるかも知れません。

グノに来る前の僕は、英文を見てどう読めば良いか、意味は分かるけれど、難しい英語で書かれた難しい概念を理解する能力がありませんでした。自分の頭で考え、リアルタイムにリズミカルに理解する能力は、グノでなければ絶対に身につかなかったと思います。グノで学べたからこそ、ネイティブのように理解する、僕の英語の基盤ができた実感しています。

しっかりした英語の基盤を持っているという自信は、人生を大きく左右することだと思います。研究者を志す人に限らず、企業などに就職して仕事をする場合でもきっと同じはずです。これからは、テストで良い

点数を取る英語ではなく、英語的に考えられるネイティブな英語脳が求められる時代だと思います。そうした基盤をつくっておけるか否かで、次のステージで新しい分野の英語を身につけるときの成長がまるで違うはずです。

僕自身の将来については明確なビジョンを未だ描けていません。どこかの大学で研究を続けているのか、研究一筋ではないかも知れないという気持ちもあります。いずれにしても、今回のUCLAへの留学は、自分の将来を見極める新しいステージになるだろうと考えています。グノで培った英語を武器に、いろいろなことを経験して、研究者として、また一人の人間として、自分を成長させていきたいと思っています。

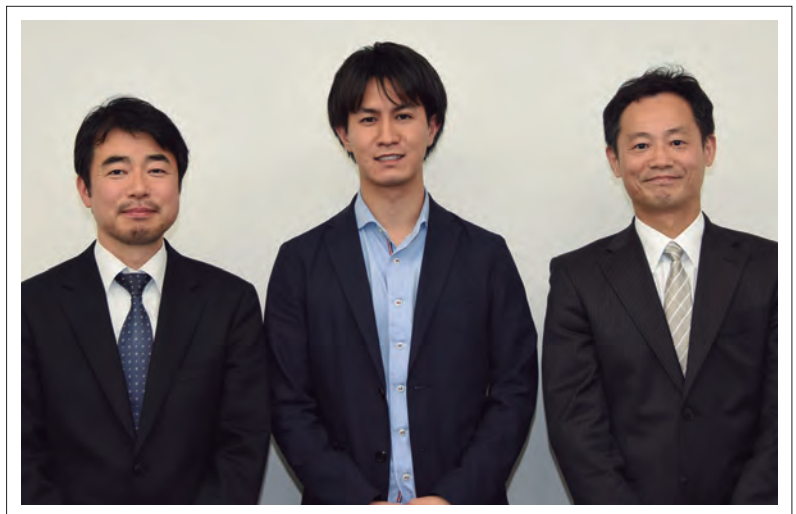
グノ時代の二人の恩師

読解の中山先生からは、多くの準備をされて生徒一人ひとりのことを本当に思って授業をしてくださっていることが伝わってきました。そうした熱意が伝わったからこそ、「この人は絶対に信頼できる」と思えました。英文を前から読み上げ、文節で区切って解釈、というスタイルで解説を進めてくださっていたのが印

象的で、役に立ちました。難しい英語でもリズミカルに頭から理解していく力を養うことができたのは、この解説の仕方あってこそだと思います。今でも先生の声が耳に残っています。

中山先生がアクティブな印象がある一方、作文の本原先生は冷静沈着な感じで、読解と作文、お二人のコントラストが絶妙でした。僕は帰国生ということもあって、たいていの生徒より英文に触れた機会、知識は多かったと思います。その僕が書く英文を正確に添削してくれる人がいる。そのことが「すごいな」とただただ驚きつつ、「この人に認められるような英文を書きたい」と思っていました。自信のない言い回しには、「こうしたほうが良いと思います」といつもコメントを下さっていて、作文力がつくのを実感していました。あまり褒めなさそうな方だったので、「よく書けていると思います」というコメントがもらえた時はとても嬉しかったのを覚えています。

お二人ともずっと面倒を見てくださって、すごく安心して授業を受けることができました。感謝の気持ちしかありません。本当にありがとうございました。



英語科：本原昭彦先生（左）、グローバル代表：中山伸幸先生（右）

※グノレット7号『グノOB 帰国生座談会』にご参加いただきました。



今いる場所に立っているのは、英語を基点に、さまざまな出会いが生まれたからです。

7期生 ^{はせがわてつや} 長谷川 哲也 さん

東京大学大学院 情報学環・学際情報学府
学際情報学専攻 文化・人間情報学コース (2017年度より)
《開成／現・東京大学教養学部教養学科 超域文化科学
分科 現代思想コース》

英語力を買われて NPOに参加

高校時代には限られていた人間関係が、大学に入って一気に広がりました。1年の頃から、東大生と東大の卒業生を繋げる団体の運営に参加して、その過程で実に様々な方々とお会いしました。そうした中から自分の興味を赴くままに取捨選択していき、あるNPO法人が開発した『デジタル地球儀（触れる地球）』のプロジェクトに出会いました。以後ずっと、そのプロジェクトに打ち込んでいます。

デジタル地球儀とは、リアルタイムの気象、地震、渡り鳥の移動、人口爆発、地球温暖化など、生きた地球で起こりうる現象と、地球の多様な姿を球体のディスプレイの上にダイナミックに映し出す、言わば21世紀の地図です。今も学校教育で使われているメルカトル図法の平面地図は、実は16世紀の信長の時代に作られたものなんです。そんな地図だけで地理や地学、環境問題を学ん

でいては、グローバルでプラネタリーな「人材育成」など遠くおぼつかないだろうというわけです。このデジタル地球儀を用いた環境教育とコミュニケーションの一環として、高校や博物館、国際会議や万博など、さまざまな場所で展示を行っています。

実はこのプロジェクトに参加したそもそものきっかけは「英語」なんです。国連会議への展示が決まった当時、ヘルプ要員が不足していたんです。たまたま僕は英語ができたので、近しい人から「手伝ってよ」と誘われました。きっかけ自体はいたって単純。ですが、この「きっかけ」については、僕なりに思うところがあります。

学生時代は、いかに高度な学問を専攻しているといえども、あるいはプログラミングやデザインが得意だといっても、実際にプロフェッショナルな社会人と一緒に仕事ができるレベルに到達していることは稀です。ところが英語だけは極めて例外的なスキルなのではないでしょ

うか。英語は、第一線で働いている社会人の中でも日本ではまだまだ不足している資源です。そのため、ただ英語ができるというだけで、プロフェッショナルな人たちから求められる可能性があります。英語は、自分が提供できる第一の価値として、力仕事や雑務のお手伝いにとどまらない、プロフェッショナルな人と同じ土俵に立って接することができるまさに一番手取り早いスキルだと思うのです。

国際会議の展示係を担当

今年（2016年）の5月26日、27日に伊勢志摩サミットにも参加してきました。

サミットの会場には、iPS細胞やMRJなど日本の様々なイノベーションを紹介するゾーンが設けられ、そこにデジタル地球儀も展示されたのです。僕は展示エリアで、政府の要人や各国のメディア担当者技術説明を行う役目を任せられました。



政府要人の場合、ひとつの展示を見る時間が概ね30秒とか40秒です。わずかな時間の中で、何をメッセージにすれば最も印象に残るかを必死に考えなくてはなりません。頭はまさにフル回転です。その上、セキュリティ対策の関係で、所属するNPOからの派遣要員は僕一人だけ。VIP対応だけでなく、自分たちの技術にトラブルが起こった場合の技術整備要員としての役割も担いました。

そうなんです。最初は英語力をきっかけにプロジェクトに参加しましたが、徐々に地球儀をプログラミングする技術を学んだり、少しずつ自分でできる仕事の幅が広がり、その頃には、そこそこプログラミングもできるようになっていたんです。

プログラミングに興味を持ったのは、技術者がつくるものにあれこれ言うだけではなく、自分でもコンテンツをつくってみたいとなったからです。そんな時でも英語ができれば、「MOOC / ムーク (Massive Open Online Course)」にアクセスして、世界最高のプログラミング教育を受けることができます。どの分野でも最先端のことを学ぼうと思うなら、やっぱり英語力は必須です。

哲学はその国の言葉で考える

一方で、いま大学では哲学を専攻しています。ちょうど卒論を書いているのですが、英語で読んで、英語で考え、英語で書いています。哲学は人間が思考できるギリギリの超抽象に迫る学問です。それを英語でもできるのはすごくエキサイティングなことです。

グノでは、返り読みをしないで語順のままに前から読んでいくとか、英単語を語幹や語源そして文脈から理解する指導を受けました。それはまさに、英語を外国語としてではなく、母語のように学ぶ姿勢で、そうした指導を受けたことがいま英語で哲学をやる上ですごく重要なベースになっていると感じます。

人文学では原典を読むことが重視されます。それは、和歌などを英訳してみたらどうなってしまうか思い浮かべてもらえれば分かりやすいのですが、やはり翻訳ではその作品が本来持つ「感触」のようなものが圧倒的に失われてしまうからです。和歌を本当に解したいなら、日本語で楽しめるようになった方が絶対いい。異なる人間文化を正しく理解す

るためには、その国の言葉で書かれた原典で読めることが要求されるんです。

もちろん、原典を読んでいても、それを全て頭の中で日本語に機械的に訳してしまっているのは、台無しです。だからこそ、原典を読みつつ、そのままの言語で、その世界の中で完結させることが大切です。グノの英語の指導理念はまさしくここに根差していたものだったと思っています。

英語で思考する力をつける

日々英語力を磨くために僕が習慣としていることとしては、たとえば、「自分英会話」です。英語を話す相手がいないなら、自分と話せばいいじゃないか、というわけです。毎日往復30分、家と駅の間を歩きながら、一人でブツブツ言っています。内容としては、これからどうするかとか、今日反省していることとか、たわいもなくざっくばらんなことですが、こうして常に英語を口にする機会を持つことは、自分の内的思考言語を英語に切り替える、ということとも関係しています。初めは僕にとっても、いきなり英語で沈黙考するのはやはり大変なことでした。そんな時、試しに声に出し会話をするように考えると、それが見事な補助輪となってくれるんです。そして、そんな風に日々やっている内に、徐々に声に出さなくても思考できる英語脳が育っていくと感じています。

「地球」に浸れる海の中

NPOの仕事や大学での研究以外では、2年前からサークル活動でダイビングをやっています。海に潜るのもガイドやボートを使わず自分たちで探検し、宿にも泊まらず自炊キャンプ生活をするのが僕のサーク

ルの特徴なのですが、こういった体験を積むことで、ものの見方や感じ方、説得力も違ってくるように思います。いま所属しているNPOは地球メディア集団であるため、地球と直接関わりその感覚値を蓄積することはとても重要です。

もちろん海に潜ることそれ自体がとても魅力的です。山の場合は総じて山道がある、その道という人間界を取り囲むように自然界がある、というように感じますが、海の中はそんな人工的な境界線もなく、まさしく自然に包み込まれる一体感が持てます。

また、海の中は外国以上に外国というか、外国はまだ同じ人間がいて安心するのですが、海の中は自分たち以外に同種がいません。人類の支配も行き届いておらず、命に関わる様々な危険生物もいるので、相互不干渉を原則として、「失礼しますっ!」と入って行って、「失礼しましたっ!」と出ていくような(笑)。そのあたりも面白いなあと感じるところです。

何より、僕らが普段過ごしている都市生活では、自分は社会に生きているという幻想がどうしても強くなりがちですが、厳しい海に潜ると自分はこの地球という惑星に生きているんだという現実感を取り戻せて、とても有り難いことと感じています。

大学院で新しい教育をデザインしたい

来年からは、情報学環・学際情報学府の文化・人間情報学コースに進み、教育工学を専攻する予定です。教育工学とは、様々な情報技術を駆使して、これからの新しい教育のカたちをつくらうという分野の学問です。

これまで僕が携わってきた「デジタル地球儀」はITを用いることで、

人類と地球が交歓し合う新たな回路をデザインしたものであり、もちろんこの教育工学の中に位置付けることができます。

デジタル地球儀はもちろんですが、文化・人間情報学コースということで、僕はとりわけ「地球文化」を意識しています。特に日本には、旬や花見、そして蝉の声でもなんでもいいのですが、五感で季節の移り変わりを感じ取れるという、メディア・文化に溢れていると思います。たとえば和歌も、日本の四季をより解像度高く楽しむ拡張現実(AR)だと考えてもよいように思います。このように、「地球」、「文化」、「メディア」の三者が交差しあっている場所に、注力していきたいと思います。

大学院を卒業した後のことについては、まだ漠然としています。ひと頃は、大学に残って研究を続けることも考えましたが、最近あまり乗り気じゃありません(笑)。職能的な分類なら、デザイナー寄りのプログラマーを目指していますが、どこまで技術を磨いていけるか、まだ先のことは分かりません。今も暗中模索というところです。

グノーブルで学ぶ皆さんへ

僕は来年から大学院に進みますが、ふり返ってみると正直自分の今いる場所は全く想像だにしていなかった場所です。それはひとえに英語を基点として、さまざまなものに出会ってきた結果としての、偶然の産物です。

英語ができると、大学生活の中でさまざまなきっかけが生まれます。仕事しかり、情報しかり、海外経験しかり。そうして、いろいろなものに触れる機会を得ながら、自分が情熱を持てるものを見つけて欲しいと思います。

もちろんそこから先は広げてばかりいず、思い切って絞って専門性を身につける必要がありますが、まずは足がかりを見つけることが最優先です。

アメリカのシカゴに5歳から10歳までいた僕が、帰国後の日本で「意味のある英語の授業を受けられる」と思った唯一の場所がグノでした。グノの英語は単なる大学受験合格を超えてかけがえのない武器となってくれると思います。この先大学に入ってから、皆さんが情熱を持って取り組める「何か」を見つける可能性を広げるためにも、ぜひ、グノの環境を活かして頑張ってください。





グノで得られた思い。 「勉強は楽しい」、 「勉強で自分の可能性を 広げられる！」

10期生 たなか みやこ 田中美也子さん

慶應義塾大学 法学部1年
《東京女学館》

最初のうちは半信半疑

高1の夏期講習が最初の授業でした。それまでは違う塾に通っていましたが、受験が不安になって、従妹にグノの授業内容を聞いて興味を持ったのです。

初めての授業からぶっ飛びました(笑)。先生が、英語の勉強の基本は音読とおっしゃって、「それでほんとに英語ができるようになるの？」って。

まわりの友達も大学受験を意識し始めていた頃で、みんな「とにかく英語をなんとかしなきゃ」と、分厚いテキストや単語帳をめくりながら必死に勉強していたのです。私は、「基本音読」と言われていたので、その通りにやっていたのですが、しばらくは半信半疑でした。このままグノを続けているのかとも考えたことがあります。でも、やっぱり授業が楽しくて…。

私はそれまでも英語は好きでしたが、「ここに通いたい」と思える塾と出会ったことはありませんでした。

た。すべて親から勧められるままに通っていたのです。そんな私が、初めて自分から「通いたい」と母親にお願いしたのがグノでした。

突き付けられた自分の実力

グノに入る前は机に向かって勉強していましたが、グノに入ってから、壁に向かって立って勉強するようになりました。つまり音読です。壁にプリントを貼り付けて、体全体を使って音読をするようになったのです。

あと、英語に対する認識も変わりました。辛い思いもしなきゃ英語は伸びないと。

基本的にグノの英語は楽しいです。でも、要約の点数がなかなか伸びず、「こんなんじゃダメだ」と思い知らされることが何度もありました。

私は東大志望ではなかったので、要約は受験では出題されません。でも先生は、「要約は、英語をそのまま誤解せずに受け取って、それを自

分の言葉に置き換えて、語弊なく相手に伝える力が必要」とおっしゃってました。それができないということは、私は英語力もなければ日本語力もないということで、こんな状態で高等教育が受けられるのかと不安になりました。

勉強はしていたつもりです。でも、英語の土台になる力がなかったと思います。「この単語はこの文章の中でどんな意味なんだろう」と迷うこともよくありました。単語の表面的な意味は知っていても、私には大事なものが見えてきませんでした。背景的知識がなさすぎて分からないことも、論理が難しくすぎて私の思考力ではついていけないこともありました。

グノに入る前は、できると思っていたからこそ英語が好きだったのかもかもしれません。でもグノで、自分の本当の実力を思い知りました。正しい努力をしなくては本当の意味では英語はできるようにならないことが分かりました。

なんでこんなに 読めないんだろう…

グノでの授業は、高1夏期講習のとき、一番基礎クラスからのスタートでした。学校では英語の成績が良く、自分も英語が得意だと思っていたこともあり、一番下のクラスで悔しかったです。しかも、演習した問題を添削していただけて点数の分布表が黒板に書き出されるのですが、いつも自分は下のランクでした。「なんで私はこんなに読めないんだろう」と、よく泣いていました(笑)。

その頃は、後ろの席に座って飲み物を飲みながら授業を受けていましたが、クラスが上がるに連れて、「一瞬一瞬を逃してはいけない!」と強く思うようになって、一番前の席に座るようになりました。一番前だと、添削している先生の気持ちまで分かる気がして、より緊張感を持って、主体的に授業に臨めるようになりました。

そんな努力の甲斐があって、高2の春には上から2番目のクラスに上がり、夏には最上位のクラスまで上がることができました。そこで有頂天になってちょっと油断していたら、その直後にまた2番目に落ちてしまいました。成績が伸びたときにも、クラスが上下したときにも、常に音読への取り組みがカギだったと実感しています。

恵まれていた環境

グノに通い続けた理由は三つあります。一つ目は要約の点数が悪かったからです。それが悔しくて、悲しくて、「絶対に一度は満点をとってやろう」と思っていました。要約では、英語力を含めて総合的な力が試されます。自分をすごく鍛えられると思って、毎週の要約には真剣に向かっていました。毎回のように打ちのめされていましたが、納得のいっ

ていないところは必ず質問して、復習も本当にがんばっていました。

二つ目に仲間の存在です。要約が0点だったときに、あまりにも情けなくて涙を流していたら、隣にいた生徒がハンカチを貸してくれました。私はグノを一人で勉強する場だと考えていましたが、その時、仲間のいる心強さに初めて気づきました。それからはいつも、同じような志を持っている人たちといっしょなのだからと、勇気が持てるようになりました。

そして三つ目は先生です。先生は私にとってのヒーローです。グノの先生がいらっしゃらなかったら、ここまで英語の力を伸ばすことはとうていできませんでした。

グノの先生と出会ったことで、「もっと学びたい!」という意欲が生まれました。先生は生徒一人ひとりのことを本当によく見てくださっていました。でもそれは、手取り足取りではありません。毎週、やりが

いのある教材を用意してくださって、どう勉強すればいいかも教えてくださいます。でもあとは、私たちが主体的に勉強していくのを、あえて手を貸さずに見守ってくださるような向き合い方です。そして努力が結果に表れたときには、まるでご自分のことのように喜んでくださいました。

私はとても恵まれた環境で勉強ができていたと感じていました。もちろん受験で成功することが一番の目標でしたが、仮に失敗したとしても悔いはなかったと思います。

音読をサポートする グノ独自の仕組み

音読には学習効果があるとは、一般的によく言われていますが、普通の環境では継続して行うのは難しいと思います。

グノ生は違います。読んでいて楽しい英文が毎週用意されますし、そ





の英文には音声教材もあります。ネイティブのナレーターを真似していると、自分もネイティブスピーカーになったような感覚を味わえます。お手本になる音声のない音読学習は、結局のところ自己流で、でたらしめになってしまうことがあると思います。

先生が背景まで含めて解説してくださいますから、しっかり理解もできます。全体の主旨から、細部のニュアンスまで、100%理解した上で、他の人に伝えるつもりで繰り返し音読するのが、グノ流の音読です。

また、音声のパターンに、普通のスピードと速いスピードがあったことも使い勝手が良かったです。今日は疲れたなと思う時は、普通のスピードでベッドに寝転びながらシャドーイングをして、余力がある時は速いスピードで音読するなど、メリハリをつけて学習できるような選択肢があったのも楽しく勉強できたポイントだと思っています。

私にとってシャドーイングは、気分転換の要素が高かったと思います。授業で学んだ教材は、翌日には暗記するほど音読をしていたので、リスニングの授業で扱った音声教材でシャドーイングしていました。覚えていないからスリリングだし、視覚情報がなくなることで、耳がより研ぎ澄まされて英語の耳になるような感覚があってとても楽しかったです。

私立、国立を問わず 対応できる英語力

グノが生徒に身につけて欲しいと考える英語力と、大学が求める英語力は、おそらく一致しているのだと思います。ただ単に、受験用の読み書きができるようになるだけでなく、自分から発信していく力がグノでは培われます。音声教材が充実しているので英語を聞く耳も鍛えられます。毎日楽しく音読やシャドーイ

ングができるので、堂々と英語を話す口もできます。こういうところが他の塾との違いだと思いますし、大学生に求められる本質的な力ではないでしょうか。

確かにグノのやり方は、受験勉強をやっている感じではありません。ただ結果として、受験のための力もついているのがグノの英語の特長です。だからこそ、私立や国立を問わず、いろんな大学の英語に対応できるのだと思います。

私の大学受験は、一番最初が上智大でした。その時は、さすがに少し緊張しましたが、幾つかの大学を受けているうちに、自信満々で試験に臨めるようになりました。

第一志望の慶應法学部は受けている最中に「ヤバイ！」と思いました。というのも、慶應法学部の英語は、量が多く、難しいという印象だったのに、本番の問題が簡単すぎて、「これでは差をつけられない」と思ったのです。

結局、受験したところはすべて合格をいただきました。本番までは100%「いける！」と思ったことはありません。ただ心の中では、私はグノでの勉強を通して成長できた実感があったので、「これで受からないわけない」という自信もありました。

大学の先生にも 認められたスピーキング

グノの音読で、私はスピーキングの土台も築いていただきました。自分では自覚していなかったのですが、大学の授業で皆の前でプレゼンをする、帰国子女と間違われることも少なくありませんでした。

多くの人は、大学では単位の取りやすい授業を選択しがちですが、私は英語をさらに深く追求したくて、一番キツイと言われている授業を取りました。

その授業では、1週間に100個の英文を暗記して、2週間に1度、その中から自分の好きな英文を皆の前でプレゼンします。1度でも止まってしまうたらそこでおしまいとなり、かなり厳しいハードルが課せられた授業です。その授業で先生から誉めていただきました。嬉しかったし、さらに英語が楽しくなりました。

グノではスピーキングの授業はありませんが、音読することによって、スピーキングの力も鍛えられます。ほとんどの人は、人前で英語を話す場合、いつもより声が小さくなったり、恥ずかしさからか、わざと日本人っぽい発音で話そうとします。それはちょっと格好悪いし、それでは英語は上達しないと思います。

高校生の頃、私はお風呂の中でもずっと音読をしていましたし、両親にも音読を聞いてもらっていました。そういう取り組みを続けたことで、人前で英語を話すことに全く抵抗感がなく、むしろ「聞いてよ!」という感じになりました。その結果、今の私は、日本語はもちろん、英語も話せる口になれました。

グノで頑張れたことは私の財産

グノで得たものはたくさんあります。何より英語力を伸ばせたことですが、もっと広い意味で言うなら、「勉強することが楽しい」ということです。これは私の受験期の口癖でした。

先ほども言いましたが、グノ以前は、英語ができると思っていたから楽しかったわけですが、一番基礎クラスでグノに入って、自分の力が多くの人より劣っていると感じてから人一倍勉強したと思います。もちろんそれは、「悔しい気持ちをバネにして」といった部分もありますが、それ以上に、ワクワクするような新

しい発見が常にあったからです。延長時間も全く気にならないほどのめり込み、「勉強って、こんなに楽しいものなんだ」、「勉強すれば、自分の可能性をどんどん広げられる」と心から思っていました。

将来の目標はまだ決まっていませんが、「こんな勉強をしてみたい」という思いは、やっぱり英語と結びつくことが多いです。私にとって受験はゴールではありません。グノで学んだことも、これからの私の人生の土台づくりだったと思っています。とくに高3の1年間の頑張りは、きっと私の財産になるはずです。その思いを、これからの大学生活やその先の人生の中で活かしたいと思っています。

最後に言いたいのは、これまでのグノレットには、もともと優秀な人が多く登場していたように感じていました。私はそうした方たちとは違います。英語は好きでしたが、できるわけではないし、要約だって最後まで飛躍的に伸びたわけではありません。

もともと優秀な人たちとは比べようありませんが、グノに入って良かった、グノで頑張ったという気持ちは負けません。その気持ちを、グノの先生は見てくださっていると実感できていたので、さらにいっそう頑張れました。

私より優秀なのに音読をおざなりにしている人は、授業中の答え方で分かります。そんな人を見ると、こんなに恵まれた環境があるのに「もったいないな」といつも思っていました。

グノブルで学ぶ皆さんへ

私にとってのグノは楽しい戦場でした。授業前はいつも緊張していましたが、教室を出るときは、「本当に良かった」と思えました。グノには心から感謝しています。英語が伸び悩んでいる人を勇気づけられればいいなと思って、今日はいろんなことをお話させていただきました。

私はグノレットをよく読んでいました。そこに登場される先輩方は、「英語の力を伸ばすなら、何より音読!」と発言していましたが、「ほんとな?」と思っていました。でも、先輩方を同じ立場になってみると、私も同感。「やっぱり音読しかない!」と思います。

先生の言葉を信じて、やるべきことをしっかりやること。自分のガッツが大事です。本当に「頑張りたい!」という気持ちがあれば、グノで伸びないはずがありません。短時間でもいいので、毎日の音読を欠かさずに頑張ってください。



保護者座談会 2016

大学受験で、親として唯一貢献できたのは、「ベストな塾を選んだ」ということでしょうか。

今年の保護者座談会には、『東大合格特集号』(Gno-let Vol.17)にご登場いただいた小高美和さん(理Ⅰ・桜蔭)、佐藤航智さん(理Ⅰ・駒場東邦)、高田悠介さん(文Ⅱ・東京学芸大附属)、古田陸太さん(理Ⅰ・暁星)の保護者の皆さまにお集まりいただきました。

今回の座談会で見てきたものは、それぞれの

ご家庭なりのサポートの仕方に違いはありますが、「子どもたちが主体的に勉強できる環境の見極め」、そして、「子どもたちの努力を見守り応援すること」、それが子どもたちの成長につながる、ということです。それを実現された皆さまの座談会レポートをお届けします。

(取材・文：吉村高廣)

◎ご参加いただいた保護者の皆さま 小高 貴子さま 佐藤 達さま 高田 幸子さま 古田 美登里さま



小高 貴子さま
小高 美和さんのお母さま
東大理科一類1年
(桜蔭出身)



佐藤 達さま
佐藤 航智さんのお父さま
東大理科一類1年
(駒場東邦出身)



高田 幸子さま
高田 悠介さんのお母さま
東大文科二類1年
(東京学芸大附属出身)



古田 美登里さま
古田 陸太さんのお母さま
東大理科一類1年
(暁星出身)

私たちがグノーブルを選んだ理由

小高：英単語をひたすら覚えて文法問題をこなすという古い学び方ではなく、「将来使える英語を身につける」というグノーブルの教育方針に惹かれて季節講習に通うことを勧めました。他塾の体験授業や季節講習は「つまらないから通いたくない」

の一点張りだった娘が、唯一、「ここは楽しい！通いたい！」と言ったのがグノーブルでした。無味乾燥な受験のための英語ではなく、やはり、「読める」「書ける」「話せる」ということにつながる英語教育は大切ですし、何より、本人が楽しく通えたことが一番だったと思います。
高田：息子の学校は行事が多く、部活も盛んです。塾は、本人が楽しん

で通えなければ続けることができないうらうと思っていました。そこを基準に探したところ、グノーブルに絞り込まれてきたんです。グノーブルには学芸大附属の先輩方もたくさん学んでいらして、その方たちは学校でも塾でも頑張っていると聞き、息子もここなら続けられるだろうと思いました。

振替授業があることも大きなポイ

ントでした。学校の先生からは「塾に行くのは2つの学校に通うようなもの。子どもの負担にならないように考えてあげてください」と言われておりましたので、そのあたりも慎重に考えて塾を選びました。

古田：息子が中学時代に通っていた塾は宿題の量が多く、加えて1クラスの人数がとて多かったので、なかなか環境に馴染めない様子でした。高1になるときに、あらためて息子の性格を考えて、楽しくて、主体的に授業に参加できる塾ということでグノーブルを私から勧めました。

グノーブルは先生と生徒の距離がとて近く、生徒をどんどん授業に巻き込んでいくということを聞いていましたので、場を楽しむことが好きな息子にピッタリではないかと思えましたし、負けず嫌いなところもあるので、クラス分けテストで自分の位置が明確になるグノーブルなら刺激にもなるだろうと考えました。塾選びのときには、合格体験記に載っている卒業生の声がとて参考になりました。

佐藤：高1になる直前に、息子の成績が伸び悩んでいたのを見て、「塾に行った方がいいんじゃないか？」と私の方から持ちかけました。私自身、いろいろな塾を見学していましたが、先生が一方向的に授業を進めていく授業は息子には向いていないと分かっていたので、先生と双方向で向き合える塾を探しました。

グノーブルの説明会に参加したとき、「これは今までの塾とは違うぞ！」と、息子よりも先に私の方が気に入ってしまったんです。駒東生はグノーブルに通う生徒が多いので、もちろん息子もグノーブルのことは知っていました。季節講習を受けて本人も即決でした。

息子からも授業の様子を聞いていましたが、この塾は、子どもの好奇心や競争心を引き出すことがとて

上手いように感じていました。

受験期の子どもとの関わり方

小高：グノーブルの先生は、熱意とカリスマ性をお持ちなので、先生が音読を勧めれば素直に「先生が言うのだから間違いない」、「先生のためにも頑張らなきゃ」と娘は思っていたようです。勉強に関しては、私は全く心配することもなく、グノーブルであった出来事や授業の様子などを楽しそうに話す娘の聞き役に徹することができました。

子どもは大人の接し方に敏感です。大人がいい加減な姿勢で向き合えば、子どもだって真剣にはなれません。逆に、熱意を持って一生懸命接してくれれば、「その気持ちに伝えよう」と思うはず。娘の様子から、グノーブルの先生方の熱意が私にも伝わってきましたので、安心して娘を任せることができました。

高田：学校だけでもやるのがたくさんあって、息子はそれをこなしていくことだけで精一杯の様子だったので、私は黙って見守ることを心がけていました。もちろん口を出したくなることも多々ありましたが、そこは我慢して、彼の方から私に話しかけてくるときだけ話をしっかり聞いて、否定的なことは決して言わないようにしていました。

そもそも息子は、何か心配事があったとしても簡単に親に話すような子ではありません。何か話しかけてきたときは、よっぽどのことだろうと身構えていた部分もありました。勉強のことでは、軽はずみに答えることができない内容のこともあり、そうしたときは「グノーブルの先生にお伺いしてみたら」とアドバイスするようにしていました。

古田：塾での様子は親として常に気にかけてはいましたが、私もなるべく口を出さずに見守るようにしていました。ただ、高田さんのところと

は逆で、うちの子は学校や塾に限らず、日ごろの出来事をよく話すほうでした。

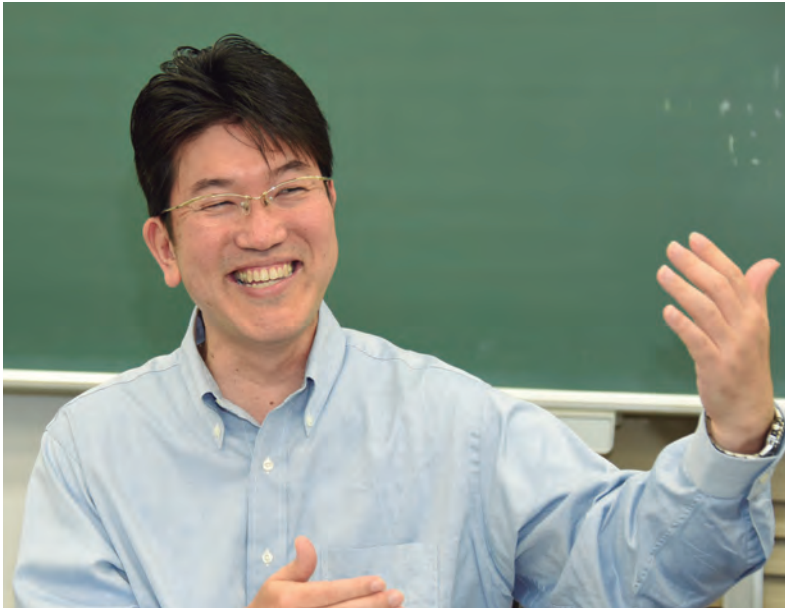
その中でも、グノーブルの話は本当によく出てきました。教材のことや知り合ったお友達のことまで、こと細かに話してくれたので、「あ、これは楽しんでいるんだ」ということは早い段階で気がつきました。楽しそうに通っている限り必ず伸びていくと思ひ、あれこれ言わずに信じて見守ろうと思ひました。

佐藤：中学受験の頃はかなり干渉していたんです。私は子どもとの距離を近く保つのが好きで、まさしく二人三脚という感じで中学受験に臨みました。きっと大学受験も同じようになるだろうと心の片隅で思っていたのですが、グノーブルでお世話になって成績がびっくりするぐらい伸びていったので、干渉したくてもできませんでした。

息子からも、「中学受験のときと違って、大学受験のときは全然口出ししなかったけど、それが僕には意外だったよ」と言われました。それは、口を出す必要もチャンスもないくらいにグノーブルでしっかり仕上げてくださいったということです。英数はもちろん、物理も国語も安心していられました。感謝この上なく、有難いことですが、正直なことを言うと、私は大学受験でも距離を近く保ちたかったのです。ある意味で少し寂しかったようにも感じていますね（笑）。

母親と父親、それぞれの役割

佐藤：おそらく多くのご家庭では、母親の方が受験に熱心で、父親は子どもの様子を後で聞くという流れだと思います。我が家の場合は逆で私が受験担当。日常的な健康管理のこと以外、母親はあまり口を挟みませんでした。とはいえ、大学受験では私もほとんど何もしていません。私



が息子の大学受験で唯一貢献できたのは、「ベストな塾を選んだ」ということでしょうか。

中学時代は東大を目指すには明らかに力不足でした。ところがグノーブルに入ってしばらくした頃、学校の模試で、東大に合格できる層の中盤くらいの成績がとれたことがありました。「まぐれにしてもよくやった！」と喜んでいたのですが、模試を受ける度にさらに順位が上がっていった、「本当にこんなことってありえるのかな？」と目を疑ったほどです。

うちの子は中学受験の頃からリビングの大きな机で勉強していましたが、グノーブルに入ってから夢中になって勉強に取り組んでいる様子を普段から母親も見っていました。そうこうするうち、「どうせやるなら理Ⅲの合格ラインを目指すんだ」という言葉が本人の口から出てくるようになり、実際に実現もできましたから、グノーブルの効果を改めて感じた次第です。

古田：うちは、生活のことも受験のことについても100%私の役割でした。主人は仕事が多忙で、息子と接する機会は週末の夜に限られてい

ました。そうしたときも、話の内容は趣味のことや将来的なことなどで、受験のことは一切触れませんでした。もちろん私から随時報告はしていましたが、それについて主人が息子に何か意見することはなく、バランスが取れていたのではないかと思います。

高田：私がかがけていたのは食事と睡眠時間といった健康面の管理です。両親の心がけとしては、いざというときに精神面をサポートできるような準備です。たとえば受験の制度や、東大入試の問題では何が要求されているのかなど。こちらから息子には言いませんでしたが、彼が越えようとしているものがどういったものなのかを理解した上で、話が出たときに答えられるようにしておく準備が大事だと思っていました。

受験の当事者は本人ですので、同じ土俵で話ができるわけではありません。ただ、何かを聞かれたとき、なんでもかんでも「分からない」ではいけないと思うのです。大学受験の全てを子どもに任せるのではなく、親は親なりの準備をした上で、陰ながら見守ることが親の務めかと思えます。また男の子ですので、父

親とはなかなか楽しい会話が成立しません。そのあたりは夫も分かっていて、自分が社会に出て遭遇したことや、会社であった出来事をもとにしながら息子とのコミュニケーションを図っていたように思います。

息子は数学が苦手で、グノのテキストとは文字通り格闘していました。それを横目で見ている主人が、いっしょになって解いていたこともありましたが、教えるというのではなくて寄り添う感じでした。息子本人は数学と格闘していましたが、主人と一緒に解くのを楽しんでいました。

小高：塾に行くとき夜が遅くなるので、体調管理に一番気をつけていました。娘は体力がある方でもなかったもので、生活ができる限り規則正しくなるように、とにかく体調を崩さないようにと。あと、受験期は常に調子がいいとは限りません。娘の様子を見ながら、「今日はもう寝た方がいいんじゃない？」とか、添削の結果が思わしくないときにも、「そういうこともあるよね」と、明るく励ますように心がけていました。

主人の方は仕事が忙しいこともありますが、そうそう頻りに接点を持てるわけではありませんでしたが、私に輪をかけて明るく振舞い、娘の受験勉強を励ますようにしていました。

あと、親の大事な役割として、講習の申し込みなどが遅れないように事務面をしっかりとやらなければなりません。グノーブルは受付の方々の対応が非常に良かったので助かりました。

受験期の我が子の様子

小高：受験勉強は長期戦です。いつ何が起きかわからないと心配もしていたのですが、本人はグノーブルを第二のサークル活動のように思っていて楽しくやっていたようです。少人数だったこともあり、良いお

友達にも恵まれて「絶対みんなで合格!」といった雰囲気でも盛り上がっていました。

グノーブルのことを話すときの娘は、いつも楽しそうでした。私などは、「受験塾が楽しいのかな?」と思いましたが(笑)、そこが普通の塾との違いだったのでしょうかね。先生との交流やお友達との切磋琢磨の中で、楽しみながらも確実に力を付けていったように思います。

高田: 1月末頃に学校がひと段落してしまうと、友人にも会えず、一人でやっていくのが辛そうな時期がありました。音楽を聴いたり、テレビの録画を見たり、体を動かしたりしながら、なんとかストレスを発散していたようです。

その頃は、グノーブルの授業の総復習に全ての時間を使っていたようです。疑問点や相談があれば、先生にメールをお送りし、その都度、彼が今何で悩んでいるのかをしっかりと理解した的確な返信をいただきました。それに対して息子は感謝し、感動もしていました。

あの辛そうな時期は、まさしくグノーブルを心の拠り所として、先生のサポートが支えになっていたのだと思います。息子はグノーブルをすごく信頼していることが分かりましたし、改めて彼にとってなくてはならないものだったということを感じました。

古田: うちの息子は大きな変化がなく、ずっとマイペースでした。今考えると凄いことだなと思えますが、それはグノーブルの先生方に絶対的な信頼があって、自分のやっている学習方法に自信があったからだと思います。だからこそ、迷いも不安もあまりなかったのではないのでしょうか。

もちろん親には見せない悩みはあったのですが、先ほど小高さんがおっしゃった通り、グノーブルは「サークルのような塾」で、本当

に、友人関係にも環境にも恵まれていたので、いろんなプレッシャーを乗り越えてマイペースでいられたのだと思います。

実は、受験期に身内で不幸があり、センター試験3日前に告別式がありました。息子も心の内では動揺していたのだと思います。二次試験のときにも気持ちが不安定だったのか、初日の数学は得点源にしたい科目でしたのに思わしい結果ではなかったようです。ただ、2日目にはグノーブルで鍛えられた英語があると思ってなんとか頑張れたようでした。体調面だったり、精神面だったり、万全な状況ではなく本番を迎えることはありえるのだと身をもって体験しました。

佐藤: うちの息子は表情ひとつ変えることなくそのまま受験を乗り切ってしまった感じです。もちろんそれはグノーブルのおかげです。

今回、この座談会に参加させていただくにあたって、「グノーブルって、どういう塾だった?」と息子に聞いたところ、迷いなく「楽しく受験させてくれる塾だった」という言葉が返ってきました。このひと言が彼の受験期の全てを物語っているの

ではないかと思います。

我が子にとってのグノーブル

佐藤: 日ごろは自分の気持ちをあまり口にしない子なのですが、受験が終わった後に、「グノーブルは良かった」と繰り返して言っていました。非常に楽しく通わせていただいたことに、親としては声を大にして感謝を申し上げたいと思います。夜遅く帰ってきても、まるで何か楽しいことがあったかのように活き活きとした顔をしていたのが本当に印象的でした。私自身は受験のときにはつらかったのですが、息子の姿は意外で不思議な感じでした。

私がグノーブルに決めた理由の1つは、先生との距離が非常に近いということです。2日目の授業のときには全員の生徒の名前を覚えていて、指導者としてのスキルや塾のポリシーがしっかりしている。そこがうちの子の感性にぴったりはまったところだったと思います。

また、グノーブルは授業を延長しますが、だらだらと伸びるのではなくて、「気がついたらこんなに時間が経っていた」という感じらしくて、実はグノーブルの授業料はとても安



いと思います（笑）。また息子も遅くまで質問をしていたようなのですが、先生方も息子が納得するまで付き合ってくれたようです。息子に言わせると先生たちは、それぞれの教科が大好きな「オタク」なのだったということでした。いつも活き活きと教えてくださって、そのうちに先生とも仲が良くなって、勉強以外のことでいろいろと相談していたようです。東大受験日も先生方の顔を見たことで緊張が随分ほぐれたようです。先生の距離がこれだけ近いのは、大学受験の塾としては他にはちょっとないかもしれません。

古田：息子は小、中、高と同じ学校にずっと通って来ましたし、高校でもクラスの半分が幼稚園や小学校から上がってきた生徒さんですので、本当にのびのびと穏やかな学園生活を過ごしてきました。ですから、大学受験が本人にとってはほぼ初めての受験ということになったわけです。

グノーブルで学ぶ生徒さんたちは、どこかのタイミングでしっかりと受験を勝ち抜いてきた優秀な方々です。本人は、「塾でも友達をたくさんつくりたい」という希望があって、多くの方と仲良くさせていたでいていたようですが、そうして出会えたお友達は息子には大きな財産にもなりましたし、大変良い刺激にもなっていたようです。

もちろんグノーブルは大学受験を目指す方の学びの場ですが、息子にとっては「人との出会いの場」といった感じでグノーブルを捉えていたように思います。振替授業でいつもと違うクラスで授業を受けたときのこと、面白い発言をした生徒さんがいたらしく、「今度、あの人に声をかけてみよう」と話していたこともありました。根本的に人に興味がある性格に加えて、グノーブルにはその性格を刺激する生徒さんが多く、そうした方々との触れ合

いが、さらに学ぶ意欲にもつながっていたようです。

高田：先生方が高い教養を持たれていることに息子は憧れを抱いていました。グノーブルで学ぶことは、大学に受かることをゴールにしない教養であり、授業のたびにそれを得ることがとても楽しかったようです。

大学に受かった今も、グノーブルの授業を受けられないことが「すごく寂しい」と言っています。受験に必要な知識だけでなく、さまざまなジャンルの話を深くお話しただけで、息子の興味の幅も広がり、これからの人生の基盤をつくる上で大事なことをたくさん得られたようです。こうしたことが息子には大きく響き、学校とはまた違った魅力を感じていたようです。

小高：娘はグノーブルに全幅の信頼を置いていました。「グノで英語をやっていたら、センター対策は必要ないし、過去問も解かなくていい」とすら言っていました。事実、配られた教材の復習だけをやって十分な実力をつけていただきました。結果、東大でもTLP※の資格をいただけるくらいに英語の実力を伸ばしていただきました。

娘は数学に不安があったようですが、最後の試験科目が英語でしたので、「英語はグノがついている」という思いが不安材料を払拭し、前向きでいるための心の支えになっていたようです。あと、入塾前は国語の成績が思わしくなかったのですが、グノーブルで大量に英文を読み書きをしたこと、幅の広い教養に触れられる解説を受けていたことで、国語の成績も一緒に伸びるという相乗効果もありました。

※トライリンガル・プログラム。入学時に一定レベルの英語力を有すると認められた学生(上位一割程度)のうち希望者を対象として、日本語と英語に加え、もう1つの外国語の運用能力を鍛えるために設けられた教育プログラム。

子どもの様子から見た 学びの場

小高：うちの娘も、グノーブルから帰ってくるときにはいつも、まるで何か楽しいことがあったような表情をしていました。要約や英作文で良い点数をとって先生から誉められたときなどは本当に嬉しそうで、そんな姿を見ているとこちらまで嬉しく



なりました。

グノーブルの授業はライブ感にあふれているというか、その場で添削していただけるので、良い点をとったときの喜びはひとしおだったと思います。いかに少人数制とはいえ、その場で全員の答案を添削するのは、先生方もきっと大変なのだと思います。やりがいのある課題を毎回提供していただいて、その場ですぐに採点してコメントまでいただけて、先生方には本当に感謝しています。

高田：普段はあまり話さないのですが、授業で感銘を受けたことはよく話してくれました。きっと自分が受けた感動を伝えずにはいられなかったのだと思います。高度な内容に話が及ぶと、私が理解できるように噛み砕いて説明してくれました。そんな姿を見ながら授業の内容を深く理解できているんだなと感心していましたし、「本当にいい塾に通っているな」と心から思えました。グノーブルの授業がある日は、「今日は何を話してくれるのだろう」と、私の方が待ちにするようなこともありました。

古田：グノーブルは、もともとは私が見つけて勧めた塾ですが、「こんなに楽しんでくれるんだ」と、グノーブルでの出来事を夢中になって話す息子を見ながら驚いていました。先生方が、生徒一人ひとりの能力や個性をよく把握されていて、集団授業でありながら、どこか個別指導のような手厚さも感じていました。

この座談会のお話をいただいてから、私もあらためて息子に、「グノーブルってどうだった？」と聞いてみましたら、「グノーブルは、先生も楽しそうな塾だよ」と即答でした。それを聞いて、「なるほど」と。先生方が楽しんで授業をしてくださるので、生徒も授業が楽しみになる。子どもたちが塾に対して前向きになれる根っこには、そうした背景があ



るのだろうと合点がきました。

佐藤：それから、先生方の横の連携が素晴らしいと思いました。数学の先生から、「もっと英語を頑張れ」と言われることもあったようで（笑）、先生がご自分の科目のみならず、幅広く生徒の学習状況を把握しているのだろうと思っていました。

私もいろいろリサーチしましたが、大学受験塾でここまでしっかり生徒を見守ってくれる塾はありません。ですので、私の職場でもお子さんが大学受験を控えた方がいますが、「一度はグノーブルに行ってみて」と言っています（笑）。

科目独自の魅力を最大限に引き出す授業

小高：英語を英語のままに理解するという方針が素晴らしいと思いましたし、娘にも合っていたと思います。読む速度が速くなりましたし、娘は暗記が苦手だったので、単語帳を丸暗記するような授業だったらきつと続かなかったと思います。長文を読む中で、自然に単語を理解していくというやり方がすごく良かったと思います。

東大に入ってから、英語でのプレゼンや作文を書く機会が多いようなので、そうした意味でも非常に役立っているようです。グノーブルでは音声教材が充実していて、耳だけではなくて口も鍛えられましたが、毎週たくさん英文を書いて添削していただきました。将来に役立つ英語力を身につけていただいたと思います。

音声教材で自然にリスニングの力がついたことはもちろんですが、グノーブルの授業が総合的に復習できるようにになっていたのが効率がよくて、そこで稼げた時間を他の科目にまわせたようです。ネットから毎週簡単にダウンロードできて通学時間に活用していたので負担感がなかったことも良かったと思います。子どもたちが勉強しやすい環境やツールがグノーブルには揃っていました。

高田：英単語の説明が語源にさかのぼって行われ、派生する意味や派生語の定着が容易だったこと、英文を英文のまま内容が把握できるように指導していただける、とても質の高い授業だと思いました。加えてとにかく先生に熱意があるのです。それを子どもが受けとめて勉強していた



ように思います。

息子は寝る前にいつもシャドーイングをしていました。その週の授業で扱ったプリントを私に渡して、本人はプリントを見ないで音声教材を追いかけていきます。私は正しくできているかをチェックしていました。初めの頃は詰まりながらでしたが大学受験の直前はスラスラ話せるようになっていました。私は何を言っているか分からなくて困りましたが(笑)、「こんなに力がついたんだ」と、驚くくらい伸びました。丸暗記をしなくても語彙力がどんどんついていったようですし、速読力も精読力も身につけていったようです。

息子は特に数学が苦手科目だったのですが、受験学年になってからは「オブジェ化したら困るから」と言って、必死になって難しい問題に取り組んでいました。授業で行うテスト演習の点もいつも低かったのですが、あれだけ不得意科目に頑張れたのは、やはり授業内容が魅力的だったのかなと思います。でなければ、あそこまで頑張れるはずがありません。答案に先生がたくさんコメントを書いてくださったことも大きかったと思います。先生を信頼して、息子なりに先生の熱意に応えようと思ひ組んだのだと思います。

国語については、授業が始まる前

から先生と生徒が談笑することもあって、とても和やかな雰囲気勉強できたようです。古文や漢文なども、先生が当時のことを現代に置き換えて巧みに説明してくださったので、けっして無味乾燥になることがなかったそうです。出題者の観点や採点基準の解説もあり、とても参考になったようでした。

古田：英語については、子どもの話から豊富な知識があふれ出てくるパワフルな先生方の様子が、私も想像



できました。英文の内容もタイムリーなものも多く、息子の好奇心をくすぐって、勉強に対するモチベーションを上げてもらえるような授業だったようです。これから英語はますます必要になってくると思うのですが、英語を英語のまま理解するスキルを身につけられましたから、この先も順調に学び進められるのではないかと、親としても

安心しています。

国語に関しては、初めは本当に苦手で、「一切関わりたくない」という感じでしたが、「グノーブルなら意識が変わるかも知れないよ」と後押しして、高3から始めました。古文も漢文もゼロからのスタートでしたが、「何とか形にすることができた」と、先生に感謝していました。後に現代文を学ぶようになってからは、英文要約の点数が上がったり、数学でも記述問題で論理関係の不整合に対する指摘が大幅に減ったようです。国語への取り組み方を学んだことで、論理的思考といいますが、頭の中を整理することができるようになったと思います。

佐藤：私自身、現在の仕事でも英語に触れる機会が多く、英語の重要性は理解しているつもりです。幼少の頃には海外に住んでいましたし、学生時代にはESSに所属していました。そんな私がある日、「英語ならグノーブル」という評判を聞きつけたのが、息子とグノーブルの出会いなんです。ただいかんせん、うちの息子は理系の科目がとことん好きなため、家に帰ってきてからもあまり英語の話はしてくれませんでした。

彼にとって良かったのは、単語帳を丸暗記しないということ。息子は暗記がとても苦手ですのでグノーブルの学習方法が合っていたと思います。入ったときには基礎レベルのクラスで、受験学年になってようやく上位クラスに上がれました。

唯一気になっていたのは、リスニングにネイティブの先生の授業がないことでした。ところが結果的には、彼が一番伸びたのがリスニング。センターにしる、東大の本番にしる、リスニングはほとんど間違いがなく、グノーブルの授業のやり方、先生の指導方法で、ネイティブを使わなくても十分力を伸ばせることが実証されました。考えてみれば、ネイティブの先生の授業を1週間に2、

3時間受けるよりも、グノーブルで用意される音声教材を活用した方がはるかに効率が良かったのだと思います。

現在、息子は東大のESSに入ってものごく楽しそうに活動しています。これほど英語に興味を持てるようになったのも、私と共通の話題ができたのも、グノーブルのおかげですし、うれしく思っています。

他の塾とかけ持ちせず数学も物理もグノーブル1本。多分、最後まで残って質問していた生徒は息子で、先生方はそれにとことんつきあってくださいました。息子はとても感激していました。塾の先生と生徒という関係にとどまらない信頼関係が築けて本当に楽しそうでした。

他には、問題をどんどん解かせてもらえる数学のシステムがとても気に入っていて、問題を考える喜びや解ける楽しさ、時には周りよりも先んじる優越感も感じられることが息子にとっては大きなモチベーションになっていたようです。

物理に関しては、受験の物理以上の、「本物の物理」を垣間見させてただけで、そこに大きな魅力を感じていたようです。「将来はJAXAに入って仕事をしたい」といった展望を抱くほどグノーブルの物理には影響力があったようです。

これは推測に過ぎませんが、グノーブルの先生の採用の仕方は、「生徒のことを真っ先に考えて一体になって指導できる人」が最優先であるように感じます。そのポリシーが全ての科目に一貫していて、そのポリシーを気に入った生徒たちが通っていることで、相乗効果が生まれているのではないかと思います。

お子さんが 受験を迎える方に

小高：グノーブルで学ぶことは初め遠回りに見えても、合格に直接つながっているとしますので、先生方

を信じて子どもを見守ることが大事だと思います。そうすれば親も不安感なく受験期を乗り切ることができるはずですよ。ここで学ぶ生徒さんたちは皆、先生を心から信じて勉強しています。親の方が不安な顔をしていれば、その思いは子どもにも伝染



すると思います。親も子どもと同じように、先生を信じるのが大切だと思います。

高田：受験は子どもにとって大変難しく、大きな壁だと思います。だからこそ親は、子どもの味方であるという気持ちを忘れずに、子どもとの会話を大切にして、学校と塾が両立できるように精一杯サポートすべきです。ただグノーブルの先生方は、そうしたこともよく分かっていると思います。何か行き詰ったときは先生が必ず応えてくださることを信じて、親子共々ついて行けば大丈夫だと思います。

古田：私ができたことは少なく、リラックスできる環境をつくることか、近所の神社に毎日手を合わせに行ったりするくらいのことでした(笑)。特別大きなサポートはしていませんが、子どもの性格をよく見極めて、子どもに合った塾選びをすることは、やはり親の大事な役目なのだと思います。もし、お子さんがグノーブルを「楽しい!」と思って通っているようならば、それは正しい選択だったと信じて、ご家族も楽しんでサポートしていければ良いと思います。

佐藤：私も全く同じで、塾選びに関しては、自分の子どもに合った塾を選ぶことが親の務めかと思います。グノーブルの場合、積極的に授業に参加すると、先生もどんどん応えてくださるので、積極性を持ってグノーブルで学べば間違いないと思います。

幸い大学受験に関して私は、ほとんど何も口出ししませんでした。自分の子どもが今、どういう立ち位置にいるのか、どのくらいの成績なのかを見逃したら、いざというときに手遅れになってしまうので、最低限子どもの成績だけは把握しておくことが大切です。あとはグノーブルを信じて見守ること。我が家の場合、結果的にそれで良かったと思っています。



社会科

講師 座談会

理科科

社会科

はまだ つよし にいぜき てつ や あべまつ ゆう た
濱田 剛士・新関 哲也・精松 佑太

出来事の背景、影響まで深く学ぶことで、
自然に社会への興味を引き出すグローバルの社会。
ご家庭とも協力しつつ、子どもたちの未来への視野を広げる！

◆ 中学受験における社会科とは

濱田：入試問題には、各中学校が考えている、これから入学してくる生徒に身につけてほしい素養が何かを表している側面があります。たとえば多くの知識が中学受験の段階で必要であると考え、それを中学、高校で活かしてほしいと考える学校は、相応の知識を入試でも課してくるでしょう。反対に多くの知識は求めないけれど、高度な思考力を求める出題をする学校もあります。

精松：入学後の中・高6年間の社会の授業で思考力は十分に鍛えていけるため、その授業の土台となる基本的な知識を小学校の間に身につけてほしいと考えている中学校では、地理・歴史・公民3分野の基礎知識を身につけているかを問う出題となっています。

逆に与えられた材料を基に物事を考えられる力を持つ生徒に入学してほしいと考えている学校は、知識を問うよりも図や表やグラフなどの資料を基にした記述問題が多く出題されます。たとえば海城中や鷗友学園中では後者のタイプの記述問題の割合が多いです。このように社会という科目でどういった学力を見たいのかは学校による違いが大きいです。

濱田：受験生たちにしっかりと将来を見据えてほしいという中学校の先生方のメッセージが伝わってくる入試問題も見受けられます。

新関：最近の入試問題では、歴史分野の出題される比率が高くなっています。とはいえ、この傾向によって分野ごとの勉強のバランスを変える必要はありません。ひとつひとつの設問を取り上げれば歴史や公民といった分野ごとの形で出題されていても、全体を通して総合的なテーマを持たせている学校も増えてきています。地理・

歴史・公民をそれぞれ単独に学びながら、なおかつそれらに関連付けて理解していくことが求められています。

精松：歴史分野の出題が増えてきているのは、小学校で学んだ歴史が中・高の勉強にも活かせる点が多いからでしょう。東京大学や一橋大学の論述問題には、難関中学で出される歴史の問題と重なる部分もあります。

かつて東京大学で「江戸幕府が参勤交代の制度を設けた理由を述べよ」という問題が出題されました。これは「大名の財政力を削いで幕府に反抗できなくさせたのは制度の結果であり目的ではない、本来の目的は何か」という問いです。東大入試では、従来の歴史の見方・考え方とは異なった視点からの出題に特色があり、歴史を学び始めた小学生にとっては、当然まだ理解が及ばないと思われるかもしれませんが、同じような問題がその後の駒場東邦中でも出題されました。中学入試であっても難関中学においてはさまざまな出来事の背景や影響まで



濱田 剛士

しっかりと理解し、自分の力で考え表現できるかどうか
が試されると思います。

受験科目としての社会科

濱田：中学入試では、受験科目を2科目か4科目かで選
択できる学校もあります。そのような学校でも4科目受
験が選択できる場合がほとんどですが、2科目受験の場
合だと、1科目でミスをしてしまうと残りの1科目だけ
で挽回するのは難しいからという理由から、可能な限
り4科目で受験した方が良いと思います。

新関：4科目受験の選択肢があるということは理科と社
会についても入学後に一定の知識が求められているとい
うことでしょう。ですから、私たちからも4科目で受け
ましようとお勧めしています。

精松：2科目の合計点で一定の合格者を決めて、さらに
4科目の合計点で残りの合格者を決める学校もあります
ので、4科目で受けていれば同じ入試の中で2回合格の
チャンスがあります。2科目で合格点に達していなくて
も4科目で合格点に達していればよいという意味で有利
と言えます。

新関：4科目の受験の場合、均等配点の学校はめずらし
く、代表的な学校としては女子学院、慶應普通部、筑波
大学附属駒場などです。ほとんどの中学校は傾斜配点に
しており、基本的には算数・国語が100点で理科・社会
が50点であることが多いですが、難関中学といわれる
学校では算数・国語が100に対して理科・社会は60～
80のバランスの学校も多いです。

精松：少なくとも6年生の夏ぐらいまでは各科目をバラ
ンスよく勉強していくことが大切だと思います。

グノーブルでの学習 [4年生]

濱田：4年生では地理、5年生では歴史、6年生になる
春休みまでに公民の各分野を学習します。この段階で中

学入試に出てくる社会の全範囲を網羅することになりま
す。6年生の4月以降は、それまでの復習と演習を行いま
す。一回習っただけだと忘れてしまう、あるいは整理
しきれないことが必ずあります。全範囲を習得した6年
生の段階でもう一回地理や歴史を勉強すると、4年生の
ときには気づけなかった視点が出てきます。4年生でこ
の地域はこの産業が盛んだと習い、5年生でこんな歴史
的背景があるからその産業が盛んなのかと気づくことが
でき、さらに6年生の一学期という早い時期からもう一
回復習できるところが、グノーブルのカリキュラムの特
徴です。

新関：4年生では講習を含めた年間全50回の授業の中
で、都道府県をひとつずつ取り上げていきます。それと
ともにテキストの中に特集ページを設けていて、たと
えば「日本の国土」「地形図の見方」であるとか、農業や
工業、水産業などの産業分野を合わせて学んでいきます。

精松：地理分野の学習範囲はとても広いので、一回学ん
ただけで6年生まで覚えているというのは、当然難しい
です。60分の中で、ひとつの都道府県と特集ページの
内容について学ぶ4年生の授業を通して、地理のあらゆる
分野において多様な観点をまず身につけていきます。

新関：たとえば、4年生の最初の授業は「島根県－日本
の国土」です。取り上げていく都道府県は北からとか南
からとかのように順序づけずに、あえてランダムにして
います。島根県を最初に取り上げたのは特集ページとの
関連性を重視したからです。特集ページ「日本の国土」
を学習するにあたって島根県は竹島という領土問題を抱
えている場所なので、それを含めて日本の国土や境界と
いったものを生徒たちにきちんと伝えていこうというこ
とで、最初に島根県を取り上げています。

グノーブルでの学習 [5年生]

濱田：5年生では1年間かけて歴史分野を勉強します。



新関 哲也



精松 佑太

保護者の方から他塾と比較して、地理のカリキュラムが1年間だけなのは短いのではないかと質問を受けることがあります。その質問について、自分たちの経験から次のようにお答えしています。時間をかければ地理が好きになるとか、問題が解けるようになるというわけではなく、むしろ地理嫌いになっていく生徒が多くなる気がしていました。また、歴史が始まるのを楽しみにしていたのに、いざ歴史の授業が始まると非常に早いスピードで授業が進み、毎回膨大な暗記に追われて結局歴史も嫌いになってしまう生徒も見てきました。

こうした反省を踏まえてグノーブルでは地理と歴史を1年ずつ勉強していく、より効率的で無理のないカリキュラムを組んでいます。

新聞：入試において歴史分野出題比率が高くなりつつある状況の中、5年生の1年間をかけて歴史をしっかり学び、物事の流れや背景までじっくり取り組むことを重視しています。



精松：入試問題では、いわゆる「ひねった問題」が多く出題されるのが地理分野です。そういった問題は6年生の後半で知識が完成してきたころに多くの演習を積む方が学習の効果は高くなります。

地理分野は、受験に向けた学習の早い時期には多くの時間をかけるよりは、むしろコンパクトにおさえておいた上で、5年生と6年生の前半で歴史、公民分野を完成させる。そうすることで夏休み以降は演習中心の学習に多くの時間を割くことができるようになるため、各分野の得点力を総合的に高めていくことができるのです。

新聞：歴史分野に長い時間をかけることで、子どもたちが非常に広い視野を持てるのがグノーブルのカリキュラムの良さだと思います。日本史だけで歴史が成り立っているわけではなく、アジアやヨーロッパの動きなどが絡んで日本史というものが作られてくる。そうしたところまで視野を広げて子どもたちに伝えることができます。

また、中学入試の傾向を見ても、単に政治史のように出来事を連ねるような一面的なものではなくて、産業史

や文化史といった分野も出題のテーマとして取り上げられています。こうした傾向に対応する理解力を、1年間かけてじっくりと築き上げていきたいですね。

精松：5年生の9月以降から短期間で歴史を勉強する場合、有名な人物や戦いなどの表面的な知識の確認だけで授業が終わってしまうのが現実です。各時代の学習に十分な時間を取ることで、さまざまな出来事の背景や影響について、授業中に疑問を投げかけて生徒たちにも考えてもらい、どんどん意見を言いながら議論して授業を進めることができます。グノーブルの5年生の授業を1年間受けることで、中学入試のみならず、その後の学習や大学入試にも生かせるだけの論理的思考力や歴史の背景の理解が身につけていきます。

濱田：つけ加えると、5年生は4年生と違って黒板の板書をノートにとらせる形をとっています。80分1コマの授業で、最初に前週の復習テストを行います。

進度がゆっくりだという利点を生かして、たとえば江戸時代だったら、江戸幕府のしくみに関してあなただったらどう思うのか、あるいは良い点や悪い点、また鎌倉幕府や室町幕府と比べてどうなのかなどを、生徒同士で話し合う時間を十分に取ることができます。

グノーブルでの学習 [6年生]

濱田：公民分野は、地理、歴史の各分野の復習に時間を取りたいということもあり、6年生の2月から春期講習までのカリキュラムにしています。歴史分野に比べると公民分野は駆け足で進むのですが、その分夏期講習の一環で理社特訓という授業を行い、そこで時事問題も絡めて公民を再度勉強します。

精松：時事問題はテーマの鮮度が大事です。今年は6月にイギリスで国民投票が行われ、7月には日本で参院選が実施されました。生徒たちは日々テレビや新聞でニュースに触れていますから、できるだけその記憶が残っている時期に触れてあげた方が、イメージがつかみやすいと思います。

濱田：オリンピックを題材にブラジルとはどういう国なのかという話とか、ちょうど時差が半日なので、そこから時差の話もできますし、周りの国では公用語がスペイン語のところが多いのに、なぜブラジルはポルトガル語なのかということは、4年生でも興味を示しやすいのではないのでしょうか。

新聞：我々がご家庭と協力しながら、日頃から生徒たちに対して、今の社会で起こっている事柄への興味を持たせていくことが非常に重要なのだと思います。実際の入試では、時事問題で点差が大きく開くことは少ないと思いますが、中学校が求めているのは単に時事に関する知識だけではありません。その背景を読み解く力、将来の

視野を広げることにつなぐ、あるいは自分なりの考え方を育てることにつなげるのが重要なのだと思います。

家庭での学習方法

濱田：4年生の場合はノートをとらずに、講師と生徒、生徒同士の対話が授業の中心です。地図帳を使うことはありますが、それに文字を書くわけではないので、ご家庭では知識事項を文字として定着させることが大切です。

よく、新しい知識がたくさん出てくるのに加えて、それを漢字で覚えなくてはいけないのは非常に負担であるという相談を受けます。漢字で覚えるというのは慣れの部分が大きいに感じます。最初のうちは苦勞したとしても、2、3か月でほとんどの生徒はそれが普通のことだと思うようになります。何より難関校になればなるほど漢字指定の出題が多いこともご理解いただきたいですね。

精松：ご家庭では量や時間を基準にした学習をするのではなく、実力が身についたかどうかという質を重視した学習をしてほしいですね。4年生の復習テストには、地図を載せ、地名を書きなさいという問題が毎回5、6問出題されます。ただ何となくテキストの問題を解いてきただけの生徒と、自分で自信を持って書けるようになるまで練習してきた生徒では、そういった問題で差がつかれます。自分の学力をアップさせることが勉強なのだ、という目的意識を持って学習に取り組んでほしいです。



新関：社会は知識が問われる教科であることは間違いありません。習ったことが頭の中に残っている段階で定着させた方が効果的なため、できるだけ早く復習をした方がよいと考えます。翌日にはテキストの解説ページに目を通していただき、その後は基礎力確認問題を通して最低限の知識を定着させてほしいです。

濱田：帰り道やご自宅に戻ってから「今日はどうなことがあったの」と聞いて、子どもが「今日は〇〇県をやった。こんな産業が盛んだ」などと答えられれば、頭の中で思い出すことができていると思います。それを細かく整理

したり、漢字で書く学習は翌日以降に行うこともできます。食事のときの会話など、大きな負担にならないようにできればよいと思います。

精松：5年生は当日に復習するのは難しいかもしれませんが。歴史分野は地理分野に比べて難しい漢字が多くなりますので、授業で出てきた言葉を見るだけで覚えるのは難しいです。ノートに繰り返し書いて覚えなければ定着しません。1週間の中で3日か4日に分けて勉強することで、より長期的な記憶が可能になると思います。

新関：5年生になると黒板の内容をノートに書き写すことが多くなりますが、私は、書き写したノートを帰宅後に短い時間で良いので見直してほしいとお話しています。見直すというのは中身を覚えるのではなく、授業中に先生がどんな話をしたのか思い出してほしいということです。それを復習のきっかけとして位置づけていただきたいですね。

濱田：歴史分野は因果関係が他の分野に比べてわかりやすい部分があります。暗記だけで一定の得点が取れる場合もあります。でもそれだけでは不十分で、どうしてそうなったのかということまで考えようと授業でも言っています。

記述問題への取り組み

濱田：4年生のテキストから記述問題を載せています。6年生の9月以降には、毎週実施している復習テストでも記述問題が毎回2問出題されます。記述問題の対策としては、まず「慣れ」が重要なポイント。慣れれば自然と書けるようになる面が大きいため、4年生から重視して進めているのです。

記述問題にも、グラフを読み取って解答させる問題などいろいろな形式があります。グラフのどの部分を読み取り、どのように自分の中で組み立てていくか、中学校側はその力を見えています。6年生の後半から演習量でカバーして合格点に達するというのは可能だとは思いますが、やはりそれだけではなく、4年生のうちからいろいろな見方、考え方について授業を通して学んでいくことで、生徒たち自身が答えを引き出せるようになってほしいと思います。

精松：今年の中学校の説明会では、多くの学校で2020年度の大学入試改革を意識した説明をしていました。与えられた資料を読み取り、そこから原因や影響を考察し、表現するというような記述式の問題がこれからの大学入試で求められるということです。

中学受験でもそのような問題を解き、表現する力をみたいという学校が増えていることは間違いありません。今年、記述問題だけでなく地形図から読み取って答える問題を出題している学校が首都圏で4割近くあったこと

からもうかがえます。4、5年生のうちからいろいろな物事について、授業中の発問の中で考えるという習慣をつけることが、現在の中学入試の記述問題を解く上で大事なのです。逆に言うと、6年生前半で思考力が身につけていけば、最後の半年の志望校対策で、どのようなタイプの記述問題でも合格点に達する力をつけることができるでしょう。

新聞：国語の記述問題では配点を高くしている学校が多いですが、社会では武蔵中、麻布中、栄光学園中、駒場東邦中、海城中など記述がメインである学校を除いては、社会における記述問題の配点そのものはそれほど高くはありません。社会の場合は傾斜配点のため、4科目の中では配点割合がそもそも低いですから、記述による表現力に加えてポイントをふまえて書いているかが判断されると思います。

知識事項の定着法

精松：基本的な知識の暗記というのは4、5年生の間のできるので土台作りは早く済ましてしまうべきです。暗記を後回しにすると6年生後半も暗記に追われて、より高度な思考力を鍛える時間がとれなくなってしまいます。

濱田：受験直前期に他の教科の追い込みをストップして社会をやるというのは、精神的にもストレスになるでしょう。最初からコツコツやっておくべきだと思います。



新聞：早い時期に知識を吸収して社会に対するものの見方、深さというものがある程度身につけることができた生徒は、社会という科目を単なる暗記の科目だと認識しません。ただし、時間の経過とともに記憶が抜けてしまうことがあります。ですから絶えず知識の補充が必要です。ただ難関校の入試で合格を勝ち取るには、それだけでは済まず、本人の社会に対する理解度や考え方が問われてきます。そういったところを4、5年生のうちから知識と一緒に培っていかうというのが我々の授業の方針です。

保護者へのメッセージ

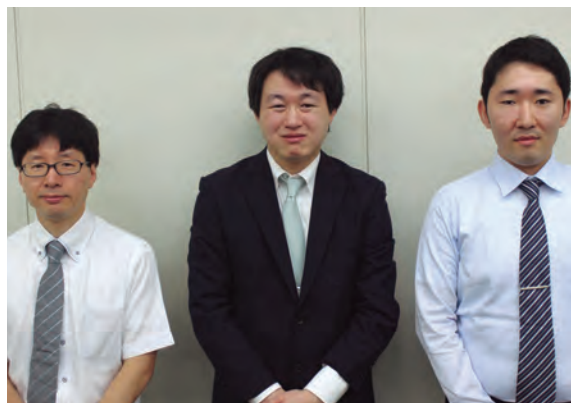
新聞：共働きのご家庭の保護者の方から、勉強が生徒本人任せになってしまい、学習の内容が保護者の理想とする質と量に達していないために不安だという相談をよく受けます。グノーブルの特長は生徒と講師の距離が近いことですので、本人に任せてよい部分とご家庭で管理すべき部分についても、お子さまの性格や状況に合わせて講師からご提案できることがあります。お気軽にご相談ください。

濱田：4年生では生徒に身の回りのことに関心を持たせることがとても大事です。普段のお買い物もぜひ一緒に連れて行ってあげてください。野菜や果物はお店のどこに並んでいるかなど、日常生活に関する問題が出題されることもあります。身の回りのいろいろな出来事を経験して、親子のコミュニケーションを通してお子さまの知的好奇心を刺激することは中学入試で大いに役立つでしょう。

精松：時事問題に関心を持たせたい場合、食事のときなどにお子さまが興味を持ちそうな話題を保護者の方から話していただくのがよいと思います。また、テレビを通して見たものはとても記憶に残りやすいので、テレビ番組も有効に活用できるとよい補助教材になります。

新聞：最近の入試問題では、選挙制度や災害に関する問題であっても、自分たちが暮らしている社会をきちんと見ているかどうかを問う問題が多く出題されています。またグローバル化が叫ばれる中で逆に日本の伝統文化を知っているかを問う問題も増えています。

濱田：日本食や日本の伝統文化を取り上げて、グローバル化が進む一方で日本の立ち位置を再認識させるような出題は、今後も続くと思います。だからこそ、ご家庭での普段の生活が大事になってきます。一方で我々にも、授業を通してさまざまな出来事に触れていく必要性も、今後もっと求められてくるでしょう。



理 科 科

ながい ひろやす もり ひであき うえはら ゆう
永井 裕康・森 英明・上原 佑

合格は子どもたちの成長の過程！
理科への興味を将来の可能性につなげる！
脳を活性化させる授業と先進のカリキュラム、
テキストが融合したグノーブルの理科。



永井 裕康



森 英明



上原 佑

◆ 中学受験の理科の特徴とは

永井：中学受験の理科の特色のひとつは学習する単元がとても多いということです。物理・化学・地学・生物の全分野を学習し、各分野の細かい単元を数えれば20～30単元ある上に、それぞれの単元の学習内容は決して浅いわけではありません。ある面では、高校受験の理科よりも広くて深い学習が要求されます。また、大学受験だと分野を絞る入試形態もありますが、あえて小学生に全分野のある程度深いところまで勉強させるというのが中学受験の理科の特徴なのと言えます。

身の回りの生物や現象といった等身大の世界の理科に対して興味関心を抱き、理由やしくみを考え学ぶ、その一方で化学的なミクロの世界で物事をとらえたり、天体といったマクロの世界で事象を分析したりと、そのスケールの大きさや幅の広さはとても面白いものです。小学生は「まだ何も描かれていない真っ白なキャンパス」「まだ水を吸っていないやわらかいスポンジ」であり、そのキャンパスやスポンジの大きさも決まっています。こういった時期にいろいろな科学の世界に触れて、

さまざまな事象を多角的に見ていく経験を積むことに中学受験の理科の意義があります。我々講師よりも子どもの方が鋭く、発想や感性が豊かで、我々が考えもしないことを発言します。私たちが勝っているのは経験くらいでしょうか（笑）。子どもたちの可能性は無限であることをきちんと認識した上で、範囲を設けずに、かつしっかりと土台を養成することが大切だと考えています。

森：理科の中で計算が出てくれば算数に近い、本文や問題文の読み取りが要求されれば国語に近い、覚えることが必要という面では社会に近いというようなことを保護者の皆様によくお話ししています。

結論としては、算数と国語と社会のそれぞれのすべてが使われるのが理科なのです。もちろん理科として勉強すべき面はあります。理科特有の原理や法則はきちんと理解して使いこなせなくてはいいませんが、先に述べたように算数と国語と社会のそれぞれの能力を高めることによって、より理解を深めることができるのが理科です。

理科を教える者としては理科の勉強をしてほしいと言

いたいところですが、そういった基となる学力がまだ身につけていない生徒にとっては厳しい要求です。算数が得意な生徒は理科が得意なことが多いのですが、逆に算数ができるのに理科は不得意という場合は、必要な知識が身につけていなかったり読み取りが苦手であったりといったことが原因であることが多く、全般的な学力を高める必要があります。こうした場合は決して短期間で解決できる問題ではないため、じっくりと腰をすえて子どもたちの成長を促すような授業をしていく必要があります。



上原：理科は物理・化学・地学・生物の4分野で、知識、計算、原理原則の理解、そしてそれらを活用しなくてはいけない科目でありさまざまな力が必要です。そのため分野・単元によっていろいろな学習の仕方があります。私自身も子どもたちと勉強する中で、その様子をうかがいながら効果的な学習方法を模索して指導しています。

特に重要なのは、原理原則の理解からの思考力、学んだ知識や原理原則をどう使っていくかということです。それこそが理科であり、近年の中学入試にも当然問われています。2020年度からの大学入試改革がよく話題にのぼる昨今ですが、今後は知識や技能に加え、より一層思考力や判断力、表現力など幅の広い力が問われるようになります。中学受験の理科の学習を通して、そういった力の礎を養っていくことは子どもたちの将来に大きく影響することだと考えています。

保護者の学習への関わり方

永井：「私が文系だったので…」 「私が子どものときに理科が苦手だったので…」、このようなお話を保護者の方からうかがうことは少なくありません。もちろん謙遜なさっているのですが、ご自身が文系だったことや、理科が苦手だったことを気にされて、そのことがお子さまの理科に対する苦手意識を助長してしまっている可能性があるのではないかとすることもあります。

仮に、親が子どものときに理科が苦手だったのであれば、その経験を活かせばよいのです。たとえば、ご自身

の経験を振り返って見たときに、幼少期に理科に対して好きと思える経験が少なかったなあと思われるのであれば、お子さまが興味を持てる環境にしてあげることが大切です。また、今から思えばあの時期のあの学習の理解が十分でなかったためにその先がつまらなくなったのかなあと思われるのであれば、そういった学習をする日に「今日塾でやる内容は、お母さんが子どものときに全然わからなかったんだよね。帰ってきたら教えてよ！」と子どもに声をかけて塾に送り出してみてもどうでしょうか（このような先入観を与えること自体についても思慮すべきかもしれませんが）。そういった環境やご家庭で補いきれない部分を提供することがグノーブルの授業だと思っています。

森：先に述べたように、理科では問題を考え、解くために必要な原理や原則が分野・単元で変わることがあります。たとえば、生物の生態系の単元では、その生物にとって損得を考えるとこういう行動をとるとというような解答の鍵になることが、本文や問題文に説明されていたり、小問の中にそれに気づけるような誘導が組み込まれていたりして、国語の読解問題のように解答を導くことができる問題もあります。もしかしたら、先ほどの「私が文系だったので…」の保護者の方が、数学や物理を究めた方よりも教えやすいかもしれませんよね。

物理の電気の単元では、ルールが決まっていて、そのルールに従って電流が大きい小さいかを考えればよいだけの問題もあります。ある意味で至極単純なゲームと捉えられます。楽しみながらゲームをたくさんしていくことで、だんだんとそのゲームが上達し、学力が身につけていきます。こういった過程で理科を好きになることもひとつの方法です。

このように、理科ではポイントとなるツールが分野によって全く変わってきます。保護者をご自宅でお子さまの学習を見てあげる場合、ご自身が不得意な単元が出てくる場合もあるでしょう。こうした時のために私たちがいるのですから、わからないところは塾でどんどん質問をしてほしいと思います。また、今、苦手な単元も他の教科の学力が高まっていくことで力がついてくる場合もありますし、現状で何が必要なかをアドバイスさせていただきます。

上原：大学受験では4分野それぞれ別の科目となりますから、理系の大学を出た保護者の方でも、すべて把握ができていない場合があります。また、5年生になると、4年生では登場しなかったような力学や化学計算などがでてきて内容的にも難しくなっていきます。

授業では原理原則をしっかり説明しています。例えば「月の公転図において月がここにあったら三日月に見える」と覚えるのではなく、「なぜそこに月があったら

三日月に見えるのか」を大切に授業を展開しています。お子さま方の学習内容のレベルが上がっていけばいくほど、根本からの理解を指導することが必要となっていきます。こうしたことを授業を通じて講師が教え導いていきます。

もし、お子さまの学習を助けていただけるのであれば、お子さまが授業で学んできた内容を説明できるかどうか、お子さまの説明を聞いてあげることだと思います。その説明が正しいか間違っているかの判断はさておき、論理的に整合性があるかどうか聞いてあげたり、言葉や表現はつたないけれども一生懸命説明してくれている点を評価してあげたりしてほしいです。このようなことが次の授業に活力を持ってのぞめる好循環を生み出すことにつながります。ご家庭で理科に関する会話を楽しむくらいの余裕があってよいのだと思います。

グノーブルの理科とは

永井：志望校合格のために徹底的な学習指導をしていくことは当然のこととして、その上で、わかる楽しさなり、悩む経験なり、毎回の授業や教材を通じて子どもたちにいろいろな物事に触れてもらい、いろいろな経験を積んでもらいたいと思っています。

理科は「理」由の科目、「理」解の科目、「理」論の科目、「理（ことわり）」を学ぶ科目です。もちろん表面的な知識や数の処理も当然必要ですが、なぜそうなのか、原理原則などを過去の科学の歴史に基づいて知り、理解し、習得する。そして、その習得したものを子どもたちが精一杯活用して過去の歴史のさらに上をいくことが科学の発展です。

グノーブルの理科で培った「理解できたときの喜びや充足感」「知識や原理を活用しようとする姿勢」などを糧にして、豊かな人生を歩んでいってほしいと願っています。我々の仕事はそのお手伝いです。

カリキュラムの流れを紹介すると、4年生では理科的な常識にたくさん触れてもらう授業をします。そこから身の回りの事象を紐解くことができたときに、子どもたちは「なるほどそういうことだったのか」と思い、学習に対する喜びを感じ、充足感を得ることができます。理科的な物事の見方や常識を増やし、身の回りの事象を紐解きながら充足感を味わうのが4年生の授業です。

次に、5年生では中学入試に必要な主要単元を一通り履修することになります。もちろん4年生時に学習している単元もありますので、学年をまたいで同じ単元を複数回学習できるような螺旋型のカリキュラムになっています。

さらに、ある単元を学習する際は、そこからの数週間と同じ単元や関連のある単元がある程度回数続いて登

場するようにカリキュラムを組んでいます。たとえば「熱」という単元を初めて勉強する4年生では、「熱とは何か」「熱の伝わり方」「水の三態変化（状態変化と熱や温度の関係）」といった学習内容が3回ほど連続して登場します。飛び石のようなカリキュラムでは深い概念理解が得られず、知識も身につけにくいと考えます。

6年生になると、4年生や5年生で扱ってきた内容を徹底的に固めつつ、高度な入試問題にも対応できるように応用的な内容も上積みして、演習量をしっかり確保しています。

森：カリキュラムを決める際、「こうすれば子どもたちに深い関心や理解をもってもらえる」「合格のための力の定着をはかれる」「子どもたちの学力の進捗に合わせたどの時期に何をウェイトとして上げていくか」などについて、私たちは議論を重ねました。

先ほども例にあがりましたが、グノーブルでは、例えば「浮力」であれば、5年で「浮力1」「浮力2」といったようにプロログ部分から深い部分までを続けてしっかりと学習してから先に進むようにしています。このような一続きの単元の学習する時期を分けてしまうと、例えば「浮力1」をやっただけでは根底の理解を得られずに表面的な学習で終わってしまいます。一方、「浮力2」の授業の時には、再度「浮力1」の内容をやり直すことになってしまいます。グノーブルでも当然単元を繰り返すカリキュラムを組んでいますが、最初の授業である程度深いところまで理解させ、それが定着度として100%でなかったとしても、根っこの部分には浸透させておくという点が特色といえるのではないのでしょうか。



永井：4年生の前期の授業の中で「昆虫の完全変態と不完全変態はどちらが得なのか？」という質問が出ました。「どっちだと思う？」と聞くと、「完全変態！不完全よりも完全の方が良いに決まっている」と言うのです。私からは、完全変態には自分では動けない蛹（さなぎ）の時期があり、保護色になる場合もあることから推察すると、敵から狙われやすい時期だともいえる、という話をする。「そうか、蛹になると逃げられないなら、蛹の時期が

ない不完全変態の方が良いのかな」という意見が返ってきます。

すると別の生徒が「でも、きっと完全変態の方が良いこともあるはずだ。だって、不完全変態の方が良いなら、みんな不完全変態のはずじゃないか」と言いました。こうしたやり取りの中で、完全変態の昆虫は蛹の時期があることで、成虫で大きく姿形を変えることができること、たとえば口の形が「かむ口」から「吸う口」へと変われば食べ物を変えられ、そうすることで幼虫か成虫のどちらかのエサとなる植物が減少したりしても種として絶滅しにくくなること、といった内容も生徒に投げかけたり考えさせたりしていきながら授業を進めました。

ちなみに、こうしたことは実際の入試問題で出題された内容でもあります。それぞれの昆虫を10個ずつ覚えなさいということも大切なのですが、極論を言うとそれは後回しでもいいわけで、ある物事を多角的に見ていく、そういうことを習慣づけることができるように授業を進めています。

さらに例をあげると「物体の運動」という単元を4年の夏期講習に学習します。ここでは細かいことを覚えてもらうのが目的ではなく「物はなぜ落ちるのか？(重力)」とか「斜面での摩擦や空気抵抗」などの概念を身につけてもらいたいのです。さらには「ピサの斜塔での落下実験」などを話しつつ、落下運動の法則なども扱います。すると、一か月後にまったく別の単元である「流水のはたらき」の授業を行ったときにこんなことがありました。

その授業では、川を運ばれてきた土砂が海底で積み重なって地層ができることを学習します。粒の大きいものはすぐに沈むので河口の近くにたまり、粒の小さなものは沈むのに時間がかかるので河口から遠いところで堆積するという内容です。粒の大きいものがすぐに沈むというのは感覚的に理解しやすいのですが、ある生徒が「でも、前にやったピサの斜塔の落下の法則だと、重いものも軽いものも同じ速さで落ちて同時に地面につくはずだったのに、なんで今回は大きい粒の方がはやく沈むの？」という疑問を投げかけてくれました。

以前の授業で学んだことがきちんと頭に残っていて、疑問を抱いたのです。他の生徒も「ちょうど私も今そう思った」とか「そういわれてみれば」となり、そこからはその生徒の質問で授業が進みました。空気抵抗の大きさと水の抵抗の大きさの違い、それぞれの抵抗の大きさに対する物体の重さの割合の違いなどの話で理解を深めることができました。まだこの時期だと「難しいことはわからないが、何となく先生の言っていることはわかる」という程度の生徒もいたかもしれませんが、4年生のうちから理科の大切な法則や原理をキチンとおさえて積み木のように積んでおく、そして少しずつでもそれを活用

して物事を考えていくといった姿勢が子どもたちに芽生えるように考えています。

5年生では主要単元が次々と出てきますが、4年生で培ってきた理科で知っておきたい常識事項をきちんと捉えておいてくれば、仮に細かい言葉などを忘れていても有機的につながってきます。こういったカリキュラムと授業で脳の活性化がはかれるわけです。このことで子どもたちは喜びを感じるようになります。「あれってそうだったのか!」「じゃあこれも!」と。多少速い進行のカリキュラムでも4年生と5年生で一通りのことを履修する意味がここにあるのです。4年で常識をつくり、5年で深く掘り下げたものを、6年生で昇華させることになるので、高度な議論にもついてこられるようになります。一気に生徒たちの理科力を受験の先まで持ち上げることができるようになります。中学受験の合格だけがゴールじゃないということをふまえて、ベーシックなものの確認をしながらも先への可能性も止めない、それがグノーブルの理科です。理科への興味を抱き続けられるよう先を見据えて学び、成長し、その過程として合格をするというのが理想です。



森：4年で興味・関心を持ち基本的な原理原則を知りつつ常識的な知識を身につけるようにする。5年になると、完璧ではなくとも知識と解法を完成させることとなります。6年になって応用問題を解けるようになるためにも、少し難しくなると思いますが一歩ずつ進めていきます。

授業中意識していることは、授業ではノートに書くことがメインにならないようにすることです。情報量が多くなると板書量が増えていきますが、頭を使いながら書いてもらえるような発問を繰り返すように工夫しています。

5年生の前半では知識中心に、後半では算数で「比」「割合」の学習が済んでいることも踏まえての化学計算や力学計算が登場し、その解法をしっかりと学ぶという流れになっています。そして6年生になって今まで蓄えたものをしっかりと使えるようになるのです。

もちろん途中から入室してくる生徒もいますから、過

去の学習内容を反復して定着をはかるための教材（基礎力テスト）も用意しています。また個別にどんだん質問ができる環境を整えて、サポートしています。

上原：4年生はまだ小数や分数の扱いに慣れていないので、計算分野はほとんど扱わずに、メダカや昆虫といった身近な生物や観察できる身の回りの現象を中心に学びます。受験までまだ余裕があるので、身近な理科的なことにじっくりと取り組んでいきます。

私が心掛けていることは、学年を問わずに授業が終わったあと、楽しかったと思ってもらえるような授業をするということです。理科というのはそう感じてもらえることができる科目で、原理原則を考えたり、知ったり、学んだりが楽しくなる学習をすることが重要だと考えています。知識事項の授業だったとしても、説明の仕方次第で子どもたちの喰いつき方が違い、強い印象を残せるようにできます。子どもたちが各単元で少しでも大きな感動を得られるように日々意識して授業にのぞんでいます。

また、先ほど「基礎力テスト」の話が出ましたが、覚えなくてはいけないものはきちんと覚える、トレーニングすべきものはしっかり反復することはとても大切です。苦手とする生徒の多い電気回路の問題などでもしっかり練習することで必ず解けるようになります。そういう教材は当然準備してあります。

永井：生徒にとっては、やはり何と言っても志望校に合格することが第一です。そのために必要な知識は覚えなくてはなりません。それを踏まえた上でカリキュラムを組み立て、教材を開発しました。覚えるものは覚える、トレーニングをするものは反復する、最後に入試でもきちんと点数を取るためのものはそろっていますので、塾の進度に合わせて勉強してほしいと思います。

家庭での学習方法

森：授業は子どもとの対話です。導入部分でこちらから話題を提供して授業が進んでいきます。テキストは毎回の授業のたびにお渡しする分冊形式をとっています。テキストには1～3のテーマがあり、家に帰ってから読んでもらいます。家で復習したくなるように、興味を持ってもらえるような授業を進めています。

授業中にノートを書く分量はそれほど多くありませんが、書き写したり、自分の手を動かすことで整理され、自分の頭の中に入ることもありますし、図を描くことが好きになったりする場合もあるので、手を動かすことの重要性、必要性を意識しながらノートをとらせています。

上原：家では大切な点を書いたノートを見て授業の内容を思い出すようにと指導しています。テキストの説明ページをしっかり読むことも大切ですが、集中して授業

に取り組む姿勢が最も大事です。

また、クラスに合わせてテキストの取り組むべき問題を毎回指定して、子どもたちが学習しやすいようにしています。

永井：家庭での復習は、4・5年生の間についてですが、一週間の中でコンスタントに理科に触れてもらうのが一番よいと思います。一気にまとめて学習するよりも週に3日程度に分けて、といった方法が良いということです。

6年生になると量も質も上がりますので、ある程度まとまった時間で、ある程度の分量をまとめて学習することが求められてきます。

森：頭を活性化させるために授業があり、その活性化した脳にテキストの内容を取り込むことが大切だと思います。テキストに載っている内容を授業で1から10まで羅列しただけではつまらないですし、生徒たち自身、興味をそそられなければ家で復習したい気持ちにはなりません。

力を伸ばすためには、家に帰って、自ら学習する姿勢がとても大切ですが、そのためには脳を活性化させ、やる気の起こるような授業を体験することが不可欠です。テキストの中には肝心な内容がたくさんありますから、そうした体験の上で家に帰ってテキストに沿って学習することで、学力が確かなものとして身につくのです。

上原：授業ではとにかく興味を持たせることに重きを置いています。その熱が冷めないうちにテキストを読んだり、GNOラーニングチェック（毎回のテキストに付く知識の穴埋めプリント）を通して、復習し、問題演習はこのような復習の後に日を分けて取り組んでほしいと思います。

永井：最後になりますが、とにかく塾をどんどん活用していただきたいと思います。講師を指名していただいても結構です。時には厳しいアドバイスをすることもあるかもしれませんが、戸惑うことやお悩みがあれば遠慮なさらず、ご連絡ください。保護者の皆さまが私たち講師と共にお子さまのよき伴走者であっていただきたいと願っております。



外国に一番近い英会話教室

子どもたちが本物の英語学習を
確実に体験できるレッスン。



グノキッズのモットーは「外国に一番近い子供英会話」です。
私たちは常にこのモットーを、子供たちの学習体験のあらゆる場面に取り入れるようにしています。
私たちはレッスン、カリキュラム、ティーチング、教材のすべてに、
生徒たちが本物の英語を体験ができるように、細心の注意をはらっています。
今回は、先生方に「外国に一番近い子供英会話」とは何を意味するのか聞いてみました。



Flat Stanley Project

こんにちは！ジェイミーです。私
がこの「外国に一番近い子供英会話」
というモットーを考えると、真っ
先に頭に思い浮かぶのが、昨年小学
生クラスで行なった「フラットスタ
ンリープロジェクト」です。『フラッ
トスタンリー』とは、アメリカの有
名な絵本です。主人公のスタンリー
は、ある日大きな板の下敷きになっ



てしまい、体が紙の様にぺらぺらに
なってしまいます。しかしそのこと
を利用し、スタンリーが様々な人
の手紙に入り込んで各国を旅するとい
うお話です。このプロジェクトの目
的は外国について学び、英語が世界
中の人々とコミュニケーションをと
る上でどれだけ役立つかを学んでも
らうこと。そのため、世界中にいる
先生の友達や家族にも協力してもら
いました！まず、生徒たちは、自分
たちがモデルの紙人形を作り、自分

たちが選んだ国へ手紙と共に送ります。それを受け取った世界各国の先生の友達や家族はその紙人形にその国の季節にあった服装を着させて、自分たちが住んでいる場所で写真を撮ってくれました。生徒たちは日本にいながらまるでその国にいるような疑似旅行を体験でき、選んだ国のことをさらにより深く知ることができたのです。このプロジェクトで生徒たちは、アメリカ、イギリス、オーストラリア、スイス、フランス、デンマーク、ナイジェリア、ガーナ、その他たくさんの国のことを知ることができました。

私がこのプロジェクトの特長と考えているのは、子供たちが他の国にいる人々と実際に手紙を交換したことです。自分たちと同じくらいの年齢の子供たちへ手紙を書くこともありました。ガーナってどんな国なのかな？イギリスって寒いのかな？さまざまな質問を実際に自分たちで考え、返事がきた時の生徒たちの嬉しそうなお顔は忘れられません！

このプロジェクトは、グノキッズを通じて実際に英語を公用語とする国の人たちに一歩近づくことができるいい例だと思います！このような体験ができる授業を今後もたくさん提供していきたいです。



ジェイミー
〈成城学園校ヘッドティーチャー〉

Class Yearbook

こんにちは。リサです。
小学生が今年行なうプロジェクト

のひとつに、自分のクラスのイヤーブックを作るというものがあります。「イヤーブック」とは、アメリカの学校で一年の終わりに一緒に過ごしたクラスメートたちの情報を集めて作る思い出の本のことです。このプロジェクトでは、自分以外の人のことをどのように英語で表現するのかを学びます。生徒たちは先生や他の生徒にインタビューをし、趣味は何なのか、お気に入りのもの、そうでないものなどをたずね合います。このインタビューのひとつのプロセスとして、「ネイティブスピーカーの子供たちにもインタビューできたら、もっと楽しいんじゃないかなあ」と考えました！そこで小3と小5の子供がいるアメリカにいる私の友達と、シェイマスの友人でオーストラリア人の先生とその教え子たちが参加してくれることになりました。

生徒たちはアメリカとオーストラリアの子供たちのビデオインタビューを見ることができ、英語が実際にどのような環境で使われているのか、理解をより深めていき、外国の人や文化に接しながら英語を使うことで、英語のニュアンス、ボディランゲージのかすかな違いや、地域のアクセントなど生きたことばも学ぶことができました。



リサ 〈グノキッズ代表〉



Unique Homework Structure

こんにちは。シェイマスです。私はグノキッズオリジナルの宿題ビデオの製作を担当しています。ジェイミーやリサが話したとおり、クラスのプロジェクトひとつひとつが、外国を身近にするものです。しかし、それだけではありません。グノキッズ独自の宿題ビデオも国際的な視点で英語を学ぶ環境づくりに役立っています。私たちは毎週、子供たちがクラスに来る前に単語やフレーズを学べるように英語のビデオを作成しています。最新のプロジェクトの宿題には新しいセクションを設けるので今からワクワクしています。その名も、カルチャーコーナーです。なんと先生たちが実際に世界中を旅している様子を見ることができるのです！最初のビデオは私が友達の結婚式のために行ったカナダとアメリカの様子です。楽しみにしててくださいね！

このカルチャーコーナーを作った理由は3つあります。

- ①日常生活の中で日本に住んでいる子供たちが英語を話す便利さに気づいてもらうため。このビデオを見ることによって、英語が世界中で話されていること、便利であることを伝えたいです。
- ②できるだけたくさんの国々や文化に触れてもらうため。このビデオを見ることにより生徒たちのモチベーションを上げ、英語を学ぶことにさらに興味を持ってほしいのです。たとえば、エピソード3では、カナダの公共

交通機関を紹介します。多くの生徒が興味を持つ電車を取り上げて、カナダの電車と日本のものを見比べます。ビデオの中には電気ではなくディーゼルで動く2段式の列車が登場します。エピソード4では、カナダの公園を取り上げます。日本の公園とどう違うのでしょうか。生徒たちに、これらのビデオを通して、日本とは違う外国の文化をたくさん知ってほしいです。③グノキッズで、自然な英語を体験してもらうため。これらのビデオを通してネイティブスピーカーがそれぞれの国で英語を日常的に使う様子も見ていただくことができます！



シェイマス
〈ビデオ教材制作責任者〉



サム
〈自由が丘校ヘッドティーチャー〉

Dynamic Team Teaching

こんにちは。ジェニファーです。クラスに2人の先生がいることはグノキッズの面白い特長です。単にネイティブスピーカーが2人いるだけではなく、先生同士の会話の掛け合いをしっかりと見せることによ



り、自然な会話に毎週ふれることができます。それを通し、母語を英語としている人同士で繰り返られる会話に表れる、ボディランゲージや言葉のニュアンスなどの細かい会話の合図を体験できるのです。さらに、先生はそれぞれの教え方をしっかりと身につけているので、自然な発音や表現を使って、子供達は外国人とよりナチュラルに会話ができるのです。グノキッズのクラスルームや校舎は、海外のクラスルームをモデルにデコレーションされています！この環境で英語教育経験を持つネイティブスピーカー2人が「Real Team Teaching」を提供すること、これこそが「外国に一番近い子供英会話」なんだと思います。



ジェニファー
〈白金高輪校ヘッドティーチャー〉

Project-Based Learning

こんにちは。サムです。私は「Project-Based Learning」というアプローチがグノキッズを「外国に一番近い子供英会話」に近づけていると思います。毎回のプロジェクトを通し、子供たちは外国における環境と考え方に深くふれ合うことができます。子供たちは自主性をもって、自分たちのプロジェクトをどのように進めたいかを選ぶことができます。最終的に目指す課題をはっきりとらえ、そこに向けて頑張ることが、よりいっそうのモチベーションを高めていく。これにより子供自身が夢になって学ぶ英語学習を成立させます。



●グノキッズ ホームページ リニューアル!●

グノキッズのホームページがリニューアルしました。これまでより見やすく、ワクワクする教室が伝わるようにしました。各種SNSと連携し、より充実した情報をお届けします。

Website

Renewed

Instagram



グノキッズ 検索
http://www.gno-kids.com



YouTube



Facebook

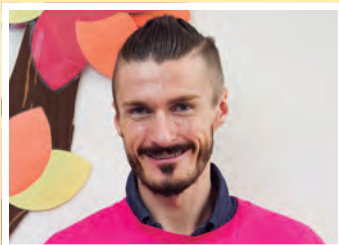


英会話グノキッズに新しい講師が加わりました



Sidonie シドニー

Country : England
University : University College London (UCL)
Time in Japan : 2 years
Time teaching : 6 years



Rob ロブ

Country : England
University : Staffordshire University
Time in Japan : 3 months
Time teaching : 4 years

シドニーとロブが 母国で経験した職業は?

シドニー : 人類学者

世界中の遺跡を掘り、時には人骨を研究所に持ち帰り、調べ、古代の人口について研究していました。

ロブ : テレビ番組スタッフ

イギリスのテレビ番組で、有名なマンチェスターユナイテッドの選手ウェイン・ルーニーと一緒に仕事をすることがあります。

※ホームページには、各先生方の紹介ページがあります。ぜひご覧ください。

グローバルの先生は「近い」

私たちはすぐに皆さん全員の名前を覚えます。

授業中には、黒板や教材ではなく、皆さんと向き合っています。

教材の用意も、授業の準備も、皆さんの顔を念頭に置きながら。

個別添削も毎回行い、一人ひとりの成長を応援していきます。

皆さんと互いに敬意を持てる関係、明るく活気ある環境を堅持します。

グローバルで、頭をフルに使う楽しさを実感してください！



2016年 大学受験合格実績 10期生〈在籍612名〉

東大各料類 110名

理科Ⅰ類	38名
理科Ⅱ類	25名
理科Ⅲ類	2名
文科Ⅰ類	15名
文科Ⅱ類	19名
文科Ⅲ類	10名
推薦 理	1名

東京大学
110名

国公立慶医
71名

医学部医学科 172名

東京医科歯科大(医)	7名
東北大(医)	4名
千葉大(医)	8名
筑波大(医)	2名
横浜市立大	4名 他
※国公立大医	計56名
慶應大(医)	15名
東京慈恵医大(医)	15名
順天堂大(医)	18名
日本医大(医)	15名
昭和医大(医)	13名 他
※私立大医	計116名

京都・一橋・東工 43名

京都大	9名
(医1名含む)	
一橋大	18名
東工大	16名
東外大	5名 他
※国公立大	計273名

慶應大
228名

早稲田大
275名

上智大
100名



2016年 中学受験合格実績 3期生〈在籍115名〉

最難関中
79名合格

開成中 6名 / 麻布中 6名 / 駒場東邦中 5名 / 栄光学園中 5名 / 聖光学院中 11名
灘中 1名 / 筑波大附属駒場中 2名 / 桜蔭中 5名 / 女子学院中 2名 / 雙葉中 3名
フェリス女学院中 1名 / 豊島岡女子中 8名 / 慶應義塾(普2・中3・湘2) 7名
早稲田(早稲田中2・早大学院1) 3名 / 渋谷幕張中 14名 その他難関中にも多数合格！



大学受験 **グローバル**
個別指導 **グノリンク**

中学受験 **グローバル**
英会話 **グノキッズ**

グローバル総合案内
www.gnoble.com